

平成20年度

ひょうごの安全安心推進戦略-マップ手法の活用  
に関する調査研究報告書

---

安全安心なまちづくり政策研究群

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

# ひょうごの安全安心推進戦略-マップ手法の活用

## に関する調査報告書

### サマリー

2009年4月

人々の安全安心感を形成しているメカニズムは一体どのようなものなのだろうか。安全安心を支える信頼感とはどのような関係を持っているのだろうか。

本報告書では、「ひょうごの安全安心戦略-マップ手法の活用」研究会における議論を基にアンケート調査を設計し、兵庫県におけるインターネット調査を行い回収した1,000件の回答を調査分析した結果をまとめたものである。

得られた知見のうち、主だったものは以下の通りである。

- ・ 一般的信頼、制度への信頼、災害時の行政への信頼などの信頼性から安全安心感と生活満足度への因果関係が明確に認められた。
- ・ 但馬を含む兵庫県の日本海側、淡路島、また農村漁村では、居住地の安全安心感が高いが、日本全体の安全安心度は低いと感じており、両者の認識ギャップが大きい。
- ・ 阪神間の都市部では地域問題に対する行政への信頼感が相対的に低いが、災害時の行政への信頼に関しては地域別に大きな差は見られない。
- ・ 日常生活における不安、心配事を序列化すると、第一が収入・所得であり、第二、第三が自分自身および家族の健康であることが確認される。
- ・ 生きていくのが辛いと感じられるほどの困難を経験したグループは、幸福度、生活満足度、安全安心度のすべてが、困難を経験していないグループよりも低い。

このことによる本報告書の政策提言のうち、主なものは以下の通りである。

提言1：人々の社会に対する信頼度は、普段の行政に対する信頼度、災害時の行政に対する信頼度、地域に対する信頼度などとの相互作用の中で形成され、人々の安全安心感、幸福感の基盤となっているため、行政への信頼を高めるような政策手段の選択、政策実行態度が何より肝要である。

提言2：地域に対する安全安心度と日本全体の安全安心度に対する認識ギャップ、行政への信頼度、災害時の行政に対する信頼度などに関しては都市部と農村漁村部との地域差が大きいため、安全安心政策の実行にあたっては、地域差に配慮したきめ細かい対策が必要とされる。

提言3：生きることが辛いと感じられるほどの困難を経験した人の安全安心度や幸福感は低いいため、そのような困難に陥らないような予防策と、困難に陥った人への精神的支援を充実させることが安全安心政策としても重要である。

## はじめに

「ひょうごの安全安心推進戦略ーマップ手法の活用」に関する調査研究は、2008年4月、財団法人ひょうご震災記念 21世紀研究機構安全安心なまちづくり政策研究群におけるプロジェクトとしてスタートした。本調査研究では、昨年度の「安全安心の意識を支える社会的信頼システムのあり方」に関する調査研究からの問題意識を継続し、兵庫県が安全安心政策を実行するための基礎データの収集とその分析を主たる目的とした。

研究遂行に当たっては、関西学院大学社会学部高坂健次教授を主査として研究会を組織し、期間中6回の研究会を開いて討議を深めた。また、昨年に引き続いて兵庫県民に対するインターネット調査を実施して安全、信頼、安心、社会不安等に関する客観的指標および主観的指標に関するデータを収集した。以下は、その調査研究の報告である。

本調査研究では、県下から無作為に1000件のサンプルを回収した昨年の調査と異なって、兵庫県下の4つの県民局単位から偏りのないサンプルを回収することとした。これによって都市部と中山間地域によるバイアスを回避しようとした。また、本調査では、自殺が日本の不慮の死因トップであることに鑑み、「生きていくことがつらいと感じられるほどの困難」に関する設問も充実させた。

2年間にわたるインターネット調査の結果、県民の安全安心意識の構造がかなりな程度明らかとなってきた。本調査の最大の発見は、全県下共通の構造問題と、安全安心要因あるいは不安要因に関する地域差とが共存している事実である。安全安心の確保を理念的目標に掲げるとしても、その実現のために必要な政策対応は、どの地域における、どのような安全や不安に対して、どのような手段を用いるべきかについて多様なアプローチをとらなければならない。

本調査研究は研究会メンバーの積極的な専門的貢献と熱意がなければ成就しなかった。研究のとりまとめに当たっていただいた高坂主査をはじめ、研究会メンバー全員に心からお礼を申し上げたい。この報告が、安全安心な兵庫を目指す政策の一助となり、さらに今後の定期的調査の始まりとなることを願っている。

2009年4月20日

財団法人ひょうご震災記念 21世紀研究機構  
安全安心なまちづくり政策研究群  
研究統括 林 敏彦

# 研究体制

研究責任者 林 敏彦 安全安心なまちづくり政策研究群  
研究統括  
放送大学教授

## 研究会メンバー

主査 高坂 健次 関西学院大学社会学部教授  
阿部 潔 関西学院大学社会学部教授  
石田 祐 研究調査本部研究員  
草郷 孝好 大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授  
澁谷 和久 国土交通省広報課長  
林 敏彦 安全安心なまちづくり政策研究群研究統括  
林 万平 研究調査本部研究員  
与謝野有紀 関西大学社会学部教授

# 「ひょうごの安全安心推進戦略-マップ手法の活用」に関する

## 調査報告

### 目 次

サマリー  
はじめに  
研究体制

序 章	安全安心の推進のために	・・・1
第 1 章	2008 年度調査に向けて	
第 1 節	調査設計	・・・9
第 2 節	調査票内容	・・・10
第 2 章	調査結果	
第 1 節	回答データ概観	・・・12
第 3 章	分析結果	
第 1 節	兵庫県民の幸福感、生活満足感、安全安心感の特徴	・・・24
第 2 節	安全安心感と諸要因の因果構造	・・・38
第 3 節	行政区別、地域別、居住地域別の安全安心感、幸福感 生活満足度、行政への信頼感、日常生活における不安	・・・42
第 4 節	「生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安」 に関する調査分析と考察	・・・52
第 4 章	結語と政策提言	
第 1 節	本研究からの暫定的結論	・・・63
第 2 節	政策提言	・・・65
第 3 節	結び	・・・66
統計付録		・・・67

## 序章 安全安心の推進のために

### 1. 調査研究の年次的位置づけ

平成 19 年度には安全安心社会研究所のもと「安全安心の意識を支える社会的信頼システムのあり方」に関する調査研究を行った。平成 20 年度には、それを継続発展させて「ひょうごの安全安心推進戦略に関する調査研究」を行った。平成 19 年度は、推進戦略の全体像を把握するために行ったのに対して、平成 20 年度は「マップ手法（地域別のデータを地図上に落とす手法）の活用」（後述）に重きをおいた。他の方法については、むしろ連続性を尊重した。いずれも最終的には兵庫県の安全安心政策の立案と実行に資することが、目的である。

### 2. 問題意識

#### 2.1 「安全安心なまちづくり」の落とし穴

本プロジェクトは「安全安心なまちづくり」をめざすものである。しかし、「安全安心なまちづくり」を自明のこととして追求してはたしてよいのかについては注意をしておかなければならない。1990 年代に入って「生活安全条例」ないし類似の条例が市町村を中心に多くの地方自治体で制定されるようになって以来、今では「安全安心」をまちづくりの理念やスローガンに掲げない市町村のほうがないくらいにそうしたスローガンは全国的に普及した。しかし、清水雅彦による『治安政策としての「安全・安心まちづくり」』（2007 年）を引き合いに出すまでもなく、「安全安心なまちづくり」は必ずしも一般市民の心からの安心と事実としての安全を保障するまでには至っていない。そればかりかむしろ市民の間に相互不信を増長しかねないシステムを生み出している。私たちは「安全安心なまちづくり」がそうした問題を招来しかねないことに危機感を抱いている。安全安心の追求自体は至極当然のことだ。しかし、安全安心の追求が「監視」の目を強化し、監視の目の強化が人々を不安に陥れるといういわば悪循環メカニズムがそこには働いている。この悪循環から私たちは抜け出さないといけない。

#### 2.2 客観的治安と「体感治安」のギャップ

では、人々は何によって不安感に陥れられているのか。治安については、「体感的治安」と客観的治安とを分けて考えることが今では一般的になってきた。それは体で感ずる治安の状態と実際の治安状態との間にギャップがあるのではないかと、との思いから広まった考え方だ。ギャップというとき、可能性としては「体感的治安」が客観的治安を上回るばあいと、「体感的治安」が客観的治安を下回るばあいとがありうる。しかし現在は「体感的治安」のほうが客観的治安よりも上回る、つまり私たちは実際以上に「危険だ」として不安にかられている。そこで私たちにとっての疑問は、私たちの「体感的治安」はどこから来ているのかである。私たちはその由来と原因を性急にマスメディアに、そしてそのみに帰着させるやり方はとらないけれども、情報伝達の有無ないし内容の偏りによって「体感」内容が左右されることは間違いないであろう。一例のみあ

げよう。昨年 5 月四川大地震が起きた。大半の日本人にとって中国・四川省での大地震は現代中国において超大災害をもたらした地震として響いたが、今からほぼ 30 年前の 1976 年 7 月には「唐山地震」が起きていて、24 万人（一説には 65 万人）もの死者を出していたのである。しかし、日本の有力紙でこれを報じた記事は 10 数年間で 10 件あまり、それもほとんどは小さな囲み記事によってでしかない。これには文化大革命下での報道規制の問題、集合的記憶の持続性、世代の入れ替わりの問題等々が関わっているし、中国における地震報道がどの程度日本人の（そして兵庫県民の）安全安心意識に影響するか、また影響したかなどは把握しがたい。しかし、この一件をもってしても報道の有無、濃淡が人々の意識（ひいては、「体感治安」）に影響を及ぼすことを理解することは十分できるだろう。

中国で起こったことについての報道と兵庫県民の意識という対比は、唐突のようであるけれども、一般化すれば、グローバル（大局性）とローカル（局所性）の関わりについては重要な問題が横たわっている。すでに私たちが兵庫県という範囲に焦点をおいている点で私たちがローカルな視点を保持したいと考えていることは言うまでもない。しかし、局所性は行政的観点から見れば、境界は明確だけれどもそこで暮らす人々にとっては行政的範囲に制約される面もあればそれに制約されない面もある。私たちが今年度とくに「マップ手法」に力点をおいたのはそうした意味での「地域差」に関わる問題意識からである。「体感治安」問題と「地域差」問題とのあいだには、密接な関連性があるのではないだろうか。

## 2.3 制度に対する社会的信頼

平成 19 年度の私たちの調査研究報告では、「社会的信頼」の大切さを強調した。それも単なる一般的な人々の間での「社会的信頼」ではなく、「制度に対する社会的信頼」こそが大切であるとの考え方である。この考え方は、私たちの調査研究の出発点でもあり、データ分析を通しての終着点でもあった。今年度も同様の仮説と同様の結論を得た。すなわち「人々の安心感は、地域への信頼感を基礎とし、地域への信頼感は行政や制度への信頼感を基礎とする」ということである。地域には、さまざまな利害のコンフリクトもあるだろうし、「ゼロにしたい」という願いや各主体の努力にもかかわらず事故や事件は避けがたいのが通例である。そのとき、一番大切なのは、コンフリクトや（不幸にして起きてしまった）事故や事件や災害被害に対応する地域の力、行政の力、諸制度の力に対して信頼を抱けるかどうかである。こうした信頼に係るものを「根源的な制度的社会的信頼感」と仮に呼ぶならば、これがあるところには「希望」があるということだろう。

## 2.4 安全・安心と他の諸価値との関係

ところで、「安全・安心」と、他方では「希望」、さらには「幸福」、「生活満足」、「(社会経済生活の)活性化」のそれぞれとの関係がどのようなものかについては理論的にも経験的にも哲学的にも未開拓の課題だ。一応、過年度同様に調査票の設計と分析によって、因果構造としては「災害時の行政への信頼」を出発点に、一般的信頼や安全・安心感を経て、最終的には生活満足感に達することが今年度のデータを加味することによって確認できた。しかしながら、全体的な布置

関連のなかで、なお「幸福」や「活性化」の位置づけは私たちにとってもなお追究すべき課題として横たわっている。

## 2.5 「幸福の加算」と「不幸の減算」

筆者の一人は、かつて「幸福の加算」よりは「不幸の減算」のほうが大切である、という意味のことを述べたことがある（高坂「頻ニ無辜ヲ殺傷シ」『先端社会研究』創刊号、2004）。安全・安心、希望、幸福、生活満足、はあらためて考えるならばすべて達成すべき肯定的価値である。しかしながら、これらの肯定的価値の達成が否定的価値（＝危険・不安、絶望、不幸、生活不満）と完全な「裏返し」の関係になっているかどうかはまだ理論的に解明しつくされてはいない。現実の生活には、昨年来の世界的金融恐慌が大きく影を落としていて、兵庫県民もその例外ではないし、行く末定かならぬものがある。私たちは、肯定的価値の増加をめざすまえに否定的価値の減少を少しでも計らないといけないのではないかと、という切迫した思いに駆られている。今年度、とくに「生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安」についてデータ分析と施策に向けての考察に力を入れたのはそうした背景があった。ただし、そうした「困難、悩み、不安」と失業、社会経済的セーフティネットの不備、人間関係の融解、等についての客観的データとの突合せは、今年度はまだ十分にはできなかつたので、それらの間の因果関係の有無・強弱についての判断は保留しておきたい。

私たちの調査研究のデータは、インターネット調査から得たものなので、そうした調査自体は十分に妥当で有効なものだとは言え、全県民性の属性からみたばあい回答に偏りがあることは否めないからである。言い換えれば、火急の問題は、通常の調査だけでは汲み尽くせないほど根深く深刻だと受け止めている。次の機会には、こうした問題についても一定の改善を図りたいと考えている。

## 3. 研究分担

研究チームは平成19年度の研究チームを事実上は継続したので、研究分担にも大きな変更はない。すなわち、「地方自治体における安全安心尺度」を構築したいという思いを共有しながら、各自の専門性を生かすかたちで討議を深めた。「社会的信頼」の計量分析については与謝野が担当した。阿部は「監視社会論」と「現代における生きづらさ」の観点から分析に関わった。草郷は、これまでの府県別HDI(=人間開発指数)の研究の実績に加えて、あらたに「希望学」の視点を援用しつつ分析をした。渋谷にはひきつづき国家の立場と視点から調査研究の全体を俯瞰してもらった。経済学を専門とする林(敏)は、全体のバランスをとりつつ、政策論につなげるように導いた。高坂は、過去5年に亘る「人類の幸福に資する社会調査」という21世紀COEプログラムでの経験を生かしつつ、全体をまとめる役割を果たした。石田(祐)と林(万)は、過年度同様、研究会運営と全体の調整にあたったが、加えて石田(祐)は「行きづらさ」の分析に力を入れ、林(万)は意識と実態の地域別分析に力を入れた。

次の機会には更にメンバーを拡充し、当初の研究テーマを展開できればと計画している。

## 第1章 2008年度調査に向けて

### 第1節 調査設計

#### 1.本調査の目的

はじめに本調査の目的と、2007年度「安全安心の意識を支える社会的信頼システムのあり方」報告書における調査内容からの発展について概観しておく。

本調査では、県民の主観的な安全安心感に資する社会システムとはどのようなものなのか、その背後に存在するメカニズムはどのようなものなのか、といった課題を中心に市民意識の構造を明らかにすることを目的とする。そのためインターネットによるアンケート調査を実施し、その回答を統計分析することにより、市民の安全安心感といった主観的な変数と、主観的な変数および客観的な属性変数との相関、および因果関係について明らかにすることを試みる。

さらに、県民の安全安心感に加えて、幸福感、生活満足度、信頼感といった項目についても質問することとした。県民の安全安心を形作る諸要因について分析する際に、生活上、重要な価値について多領域に渡る主観的なデータを取ることで、それらの価値と安全安心がどのような関係にあるのかを明らかにしたいからである。また、回答者の客観的な経済状況や属性などの項目として、居住地域、経済状況、家族構成、学歴、などの客観的データに関しても詳細な回答を求めた。客観的なデータと主観的なデータの間に乖離があるのか、という課題に焦点を当てるためである。

#### 2.本調査の特徴

本調査を行うに当たり、第一に地域性という観点を新たに盛り込むこととした。兵庫県は都市部、中山間地、離島など、多様な居住環境が含まれている県であり、それぞれの環境に応じて市民の安全安心の構造や不安の所在などが異なってくる可能性が高い。2007年度「安全安心の意識を支える社会的信頼システムのあり方」報告書では、回答者の多くが都市部に偏っており、農村部、中山間地などの実態を十分に把握できなかった。そこで、本調査では、兵庫県の県民局単位別にサンプリングを行い、阪神間（神戸、阪神南、阪神北）、播磨（東播磨、北播磨、中播磨、西播磨）、丹波（但馬、丹波）、淡路島よりバランスよく回答者を得た。また、その回答者が居住している地域はどのような属性を持つのかを合わせて質問し、都市部、農村漁村、工場地域、新興住宅地などの回答者がどの程度存在するのか把握することとした。

第二に、市民の安全安心の対極に位置する価値として、「生きていくのが辛いと感じるほどの、困難、悩み、不安」についても調査の対象とした。日本の自殺者数は1999年以降、毎年3万人を超える水準で推移しており、減少の傾向はまだ見られない。日本における自殺の実態研究は数が少ない。ライフリンク(2008)<sup>1</sup>では、県別の2004年から2006年の累計の自殺者の自殺場所と

---

<sup>1</sup>ライフリンク(2008)『自殺実態白書2008』特定非営利活動法人自殺対策支援センターライフリンク

その動機についてのデータを公開すると共に、人々が自殺に至る経路として鬱病という要因が重要な位置を占めていることを主張している。本調査では自殺や鬱病も含め、「生きていくのが辛いと感じるほどの、困難、悩み、不安」についての質的データに関する質問を含めることとした。安全安心からこぼれ落ちてしまった人たちはどのような問題を抱えていたのか、どのような支援を必要としており、また実際のどのような支援を頼ったのか、あるいは頼らなかったのか。それらについても明らかにしていく。

第三に、経済変数として、負債の項目を追加することとした。経済的にポジティブな状況の程度だけでなく、ネガティブな状況の程度についても評価し、安全安心との関係を分析を行うことが重要と考えられるからである。

## 第2節 調査票内容

### 1. 質問項目

本研究会では、2007年度「安全安心の意識を支える社会的信頼システムのあり方」報告書における調査票を基に、幾つかの調査項目を追加し調査票を作成した。以下では、本調査票の主な項目と先の調査票からの追加点について述べる。

本調査では、回答者の客観的な属性データに加えて主観的な調査項目を多く設けている。県民の安全安心感、幸福感、生活満足度、信頼感など、主観的な指標に関する質問と、客観的な回答者の属性データを比較することで、客観的データと主観的データの間に潜む乖離について調査することを目的としている。

回答者の属性に関する調査項目として、性別、年齢、同居家族構成、国籍、現住所の郵便番号、現住所の居住経験年月、現住所（市町）外からの転入経験の有無、最終学歴又は現在の学歴、現在の雇用形態、現雇用形態の勤続年月、本人年収（労働所得）、世帯年収（労働所得）、世帯非労働年間収入、貯蓄額（有価証券等資産含む）、住居形態、犯罪被害の経験、災害被害の経験、現在行っている防犯対策、現在行っている災害対策といった質問項目を設けた。

これらに加えて、本調査では自身の住んでいる地域、現在の役職、現在勤めている企業の総人員規模、世帯の過去1年間の住宅ローン返済額、世帯の現在の受託ローン残高、世帯の過去1年間の住宅ローン以外の負債返済額、世帯の現在の住宅ローン以外の負債借入残高、住宅ローン・住宅ローン以外の負債の返済に対する負担感、自身の主観的な健康度、に関する調査項目を追加した。自信の住んでいる地域について聞くことで、郵便番号では捉えられない都市部、農村漁村、新興住宅地などの主観的な地域データを聞くことで、居住地の属性についての情報を得ることができると考えたからである。所属企業における役職や企業規模を聞くことで、雇用状況についてより詳細なデータを得ることができた。負債の項目について聞くことで、負の経済状況が県民の安全安心感、信頼感、幸福度、生末満足度に与える影響についても調査する事ができる。健康度に関しては、通院日数や日常生活の動作に関する可否の質問に加えて、主観的な健康度について質問することで補完的に回答者の健康度について知ることができると考えた。

回答者の属性に関する調査項目の後には、居住地・日本に対する安全安心感、居住地・日本の治

安の変化に対する実感、主観的幸福感、生活満足度、周囲の人間に対する諸信頼感、地域の諸制度への満足度、日本の諸制度への信頼、日常生活における不安・心配事、犯罪が起きているときの周囲の／周囲への対応、自然災害時の周囲・行政の／周囲への対応、を盛り込んでいる。

## 2.主観的判断

安全安心感については、実際の安全度とは別に、「どのくらい安全なのか」という主観的評価を問う内容にしている。生活の安全安心感に関して、現在の状況と、過去3年間の変化について、日本全体と居住地域のそれぞれについて質問している。地域の諸制度に対する満足度として、地域における人間関係、地域の行政サービス、地域の治安、地域の防災、あなたの収入所得に対する満足度を質問している。

合わせて、日常生活を送るにあたっての不安や心配事を、健康、老後生活、住環境、人間関係、治安、生活の孤立、自分の収入・所得、世帯の資産・負債の項目にわたって質問したほか、自由回答式でも答えてもらうようにした。さらに、具体的な犯罪に遭うという想定の下で、また大規模災害時において、家族や自分はどの程度それに巻き込まれるか、周囲や行政、隣人はどの程度援助してくれるのか、自分は隣人を援助するつもりがあるか、という質問項目を設けた。そういった具体的な犯罪や大規模災害に遭った経験も質問している。

主観的幸福感と生活満足度について、現在の状況を5段階で評価する質問を盛り込んでいる。生活満足度については、さらに、地域における人間関係、地域の行政サービス、地域の治安、地域の防災、自身の収入・所得についても10段階評価で質問している。

信頼感については、人は大体において信用できるか、用心するに越したことはないか、という質問をした後、ほとんどの人は、信頼できるか、他人から信頼されるとその相手を信頼するか、正直であるか、善良で親切であるか、自分は人を信頼する方であるか、といった質問を設けている。一般的信頼尺度については、「ほとんどの人は」という想定が回答者にとってかなり幅広く解釈される事が分かってきた。つまり、この「ほとんどの人」の範囲を変える事で信頼感の調査結果も異なってくる。この点について、どういう人たちを「ほとんどの人」として想定しているか、という質問を後に盛り込んだ。そして、警察力、司法制度、メディア、地域行政の問題解決力、小学校、地域の食品の安全について、4段階で評価してもらう質問を設けている。

本調査ではこれらに加えて、日常生活における不安・心配事の序列（第1番目から第3番目まで）を加えた。これにより、様々な日常生活における不安の相対的な主観的重要性を把握することができる。

さらに、大きな項目として、「生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安」について幾つかの質問を追加した。そのような困難・悩み・不安の経験の有無、そういう問題が起きた時に相談できる対象の有無、どのように解決することが望ましいと考えるか、経験したのであればそれはどのような困難・悩み・不安だったのか、どのような支援があればそれが軽減されたと思うか、その問題に直面したときに他人に相談したのか、誰に相談したのか、相談しなかったならそれはなぜか、という項目を追加している。本調査では、「生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安」を経験している状態を、県民の安全安心が確保されている状態の対極に位置す

ると考えた。この質問により、そのような状況に陥ってしまった場合の支援の在り方について調査することができる。

## 第2章 調査結果

### 第1節 回答データ概観

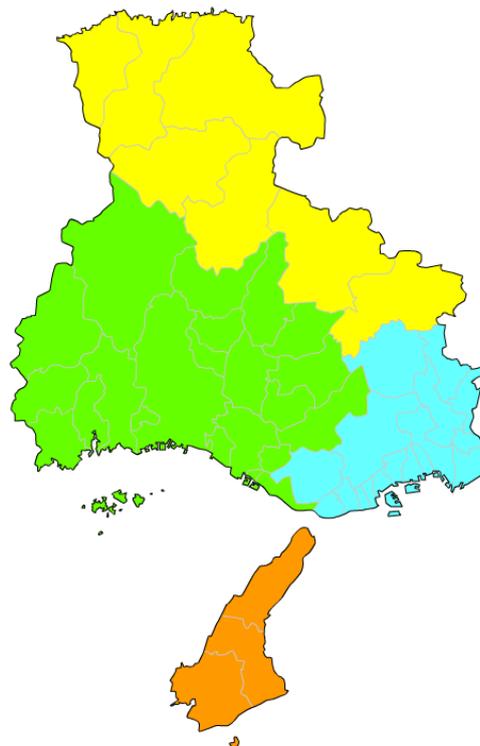
#### 1.地域別サンプル数

調査にあたり、神戸・阪神南・阪神北地域（以下、阪神間）、東播磨・北播磨・中播磨・西播磨地域（以下、播磨）、但馬・丹波地域（以下、丹波）、から各 300、淡路島から 100 のサンプルを回収することとした。詳細な地域別の回収数については、図1の通りである。

播磨地方では明石市、加古川市、姫路市にサンプルが偏る傾向が見られるが、全県については阪神間に偏らない幅広い範囲からサンプリングを行うことができた。また、居住地域別に見れば、工場の多い地域でサンプル数が 40 と少ないものの、農村漁村からも 245 サンプル、古くからの住宅地も 302 サンプルを回収している。兵庫県の中山間地や淡路島、また農村漁村や古くからの住宅地まで配慮したサンプリングを行うことができた。

第 2-1-1 図 兵庫県行政区分別回答数

県民局単位



第 2-1-1 表 行政区分別・市町村別・居住地域別サンプル数

行政区、地域、市町		サンプル数	行政区、地域、市町	サンプル数			
阪神間	神戸	神戸市東灘区	24	東播磨	明石市	71	
		神戸市兵庫区	12		加古川市	52	
		神戸市北区	17		高砂市	11	
		神戸市灘区	14		加古郡稲美町	2	
		神戸市長田区	12		加古郡播磨町	2	
		神戸西区	19		北播磨	西脇市	2
		神戸須磨区	14			三木市	10
		神戸垂水区	18			小野市	4
		神戸中央区	14			加西市	2
	阪神南	尼崎市	38	加東市	6		
		西宮市	51	多可郡多可町	1		
		芦屋市	12	中播磨	姫路市	93	
	阪神北	伊丹市	22		神崎郡神河町	1	
宝塚市		16	神崎郡市川町		1		
川西市		10	神崎郡福崎町		2		
三田市		6	西播磨	相生市	5		
川辺郡猪名川町	1	たつの市		11			
丹波	但馬	豊岡市		96	赤穂市	4	
		秩父市		30	宍粟市	1	
		朝来市	31	揖保郡太子町	12		
		美方郡香美町	19	赤穂郡上郡町	5		
		美方郡新温泉町	12	佐用郡佐用町	2		
丹波	篠山市	50					
	丹波市	62					
淡路	淡路	洲本市	46				
		南あわじ市	30				
		淡路市	24				

居住地域	サンプル
工場の多い地域	40
商店・事業所の多い地域	131
おもに古くからの住宅地(戦前からの住宅地)	302
おもに新興住宅地(戦後できたニュータウンを含む)	263
農村漁村	245
その他	19
計	1000

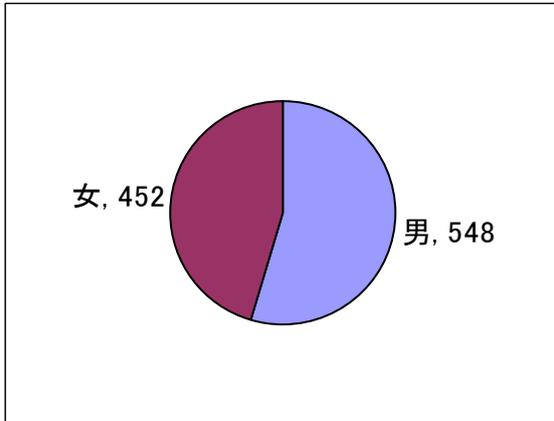
## 2. 属性の基本統計量

ここでは全 1,000 件の回収データについて、基本統計量を確認しておく。地域性、属性間の相関、因果関係、ロジット分析などは次章のテーマとする。

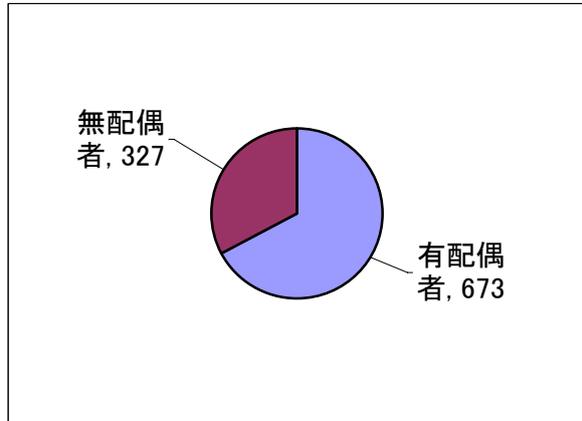
### (1) 男女比・有配偶者比・年齢層

属性の基本統計量については第 2-1-2 図から第 2-1-17 図の通りである。男女比、有配偶者、年齢層などはサンプルに大きな偏りは見られない。

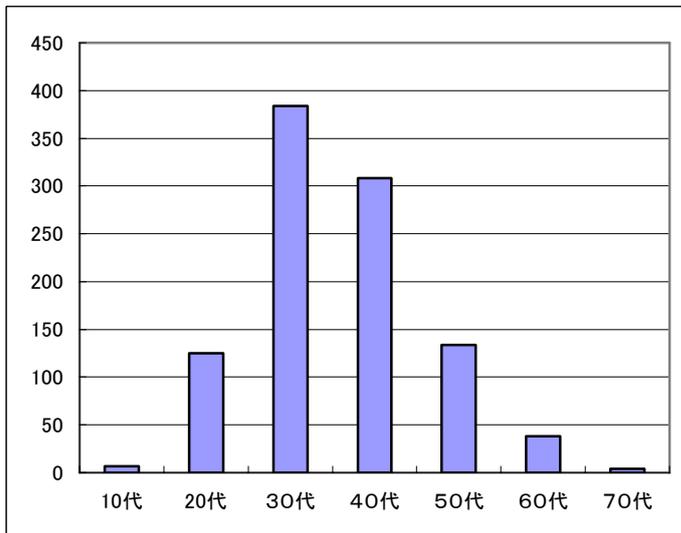
第 2-1-2 図 回答者の男女比



第 2-1-3 図 有配偶者者の割合



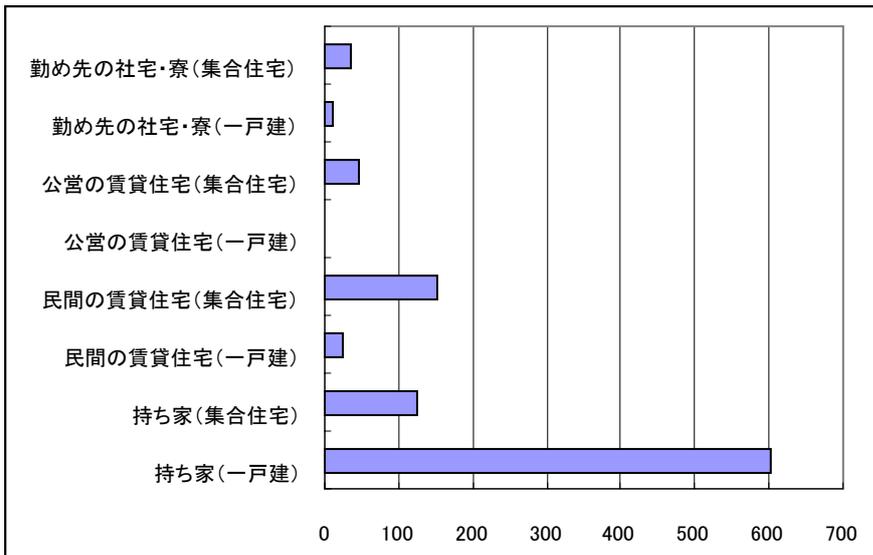
第 2-1-4 図 年齢層



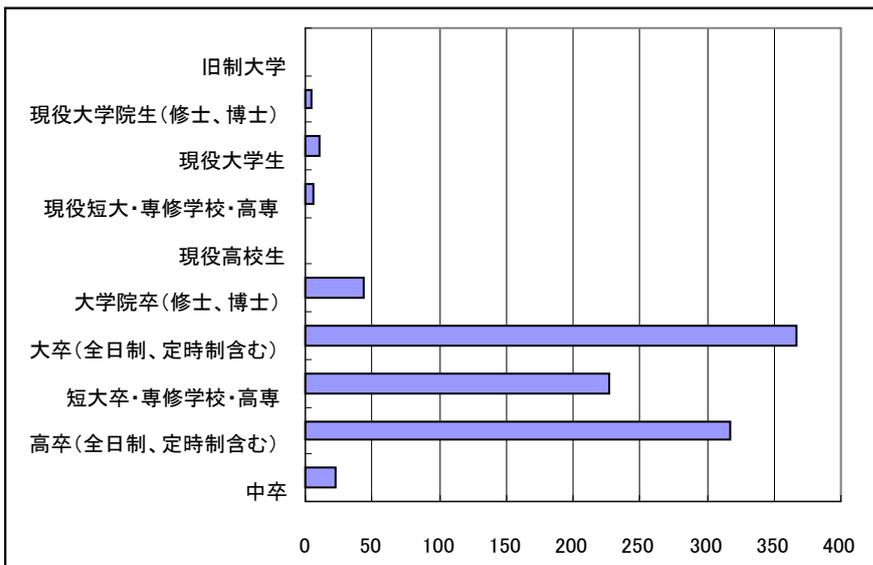
## (2) 居住形態と学歴

賃貸住宅よりは持ち家サンプルが多く見られる。学歴は高卒、短大卒・専修学校・高専卒、大卒がバランスよく含まれている。

第 2-1-5 図 居住形態



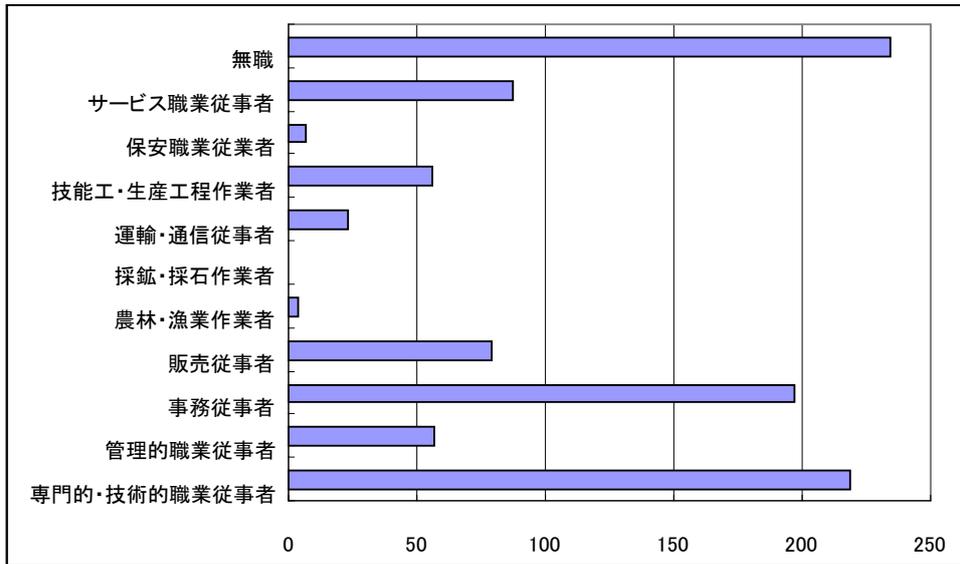
第 2-1-6 図 学歴



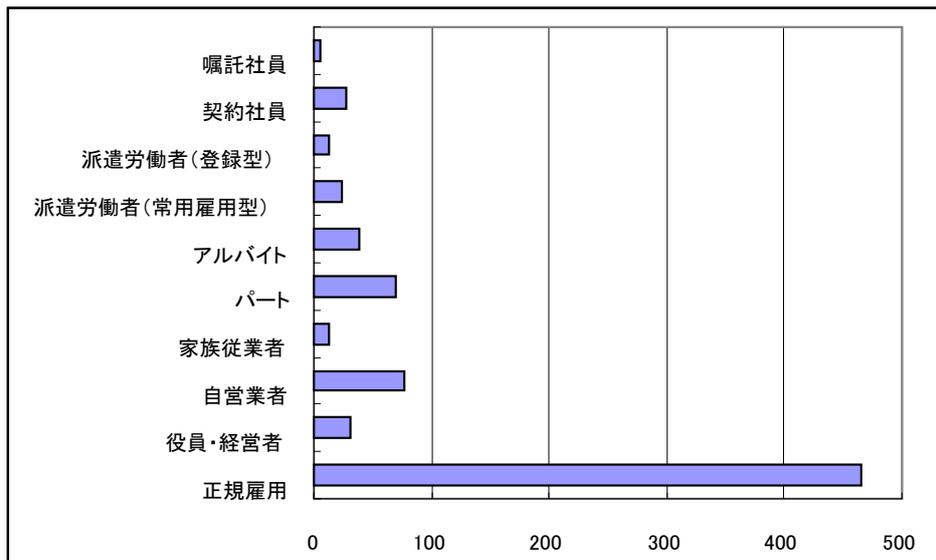
### (3) 職業

職種では、農林漁業作業者、運輸・通信従事者、技能工・生産工程作業者がやや少ない。無職の多くは女性であるが2割程度は男性も含まれている。雇用形態は正規雇用者が半数を占めるが、自営業者、役員経営者、派遣労働者（常用雇用型、登録型）、パート、契約社員に至るまで一定のサンプルを確保できた。役職の構成も役職なしが半数を占めるが管理職の部長職まで一定のサンプルを確保できた。従業員規模で見れば、4人以下の中小零細企業のサンプルが130ある一方で、1,000人以上の大企業が153、官公庁が50と幅広い層からの回答を得ている。

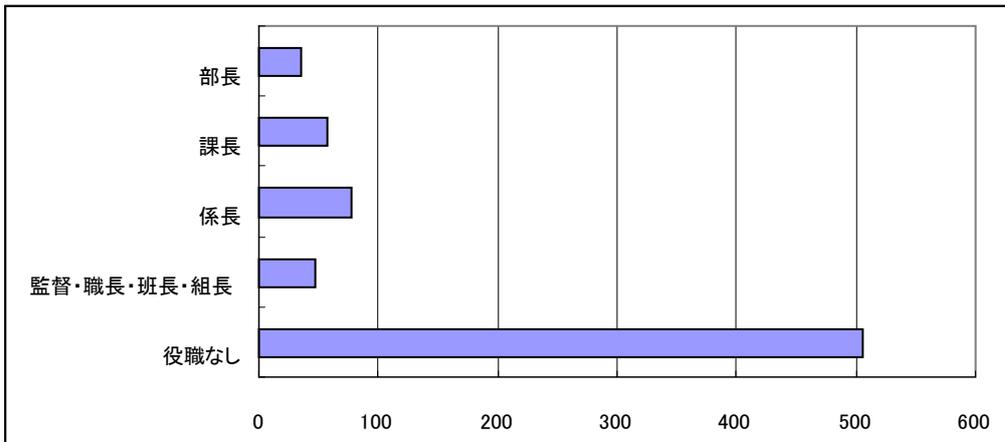
第 2-1-7 図 職種



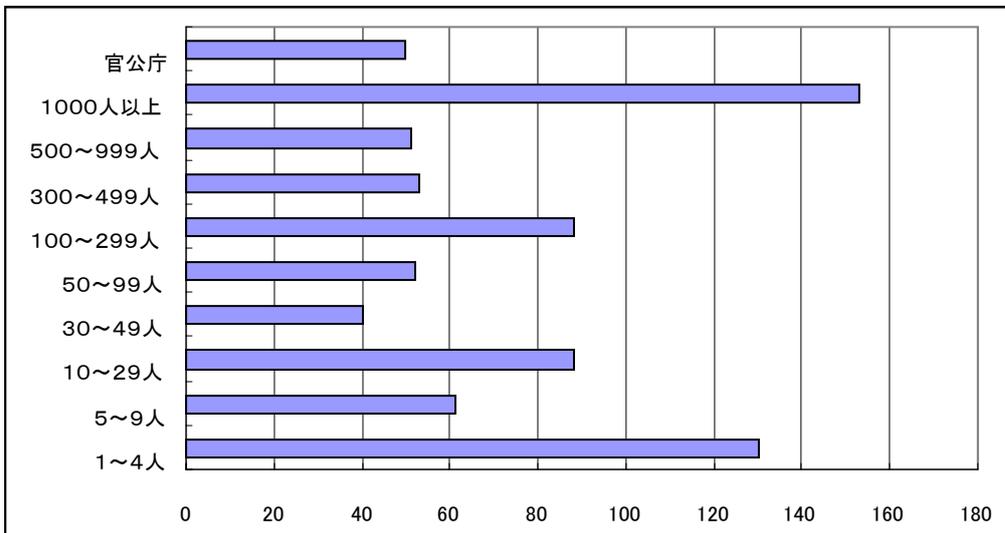
第 2-1-8 図 雇用形態



第 2-1-9 図 役職



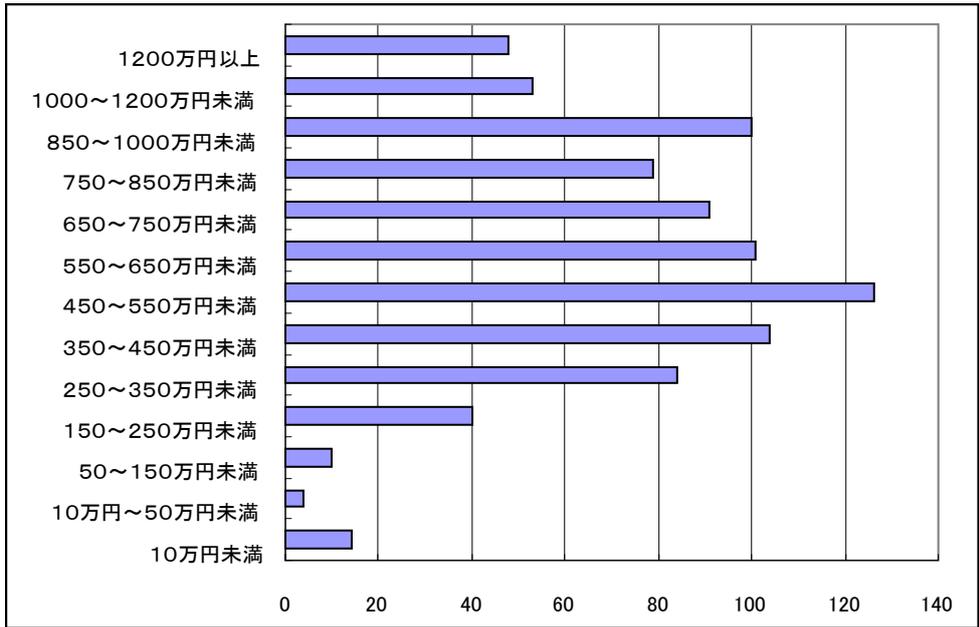
第 2-1-10 図 従業員規模



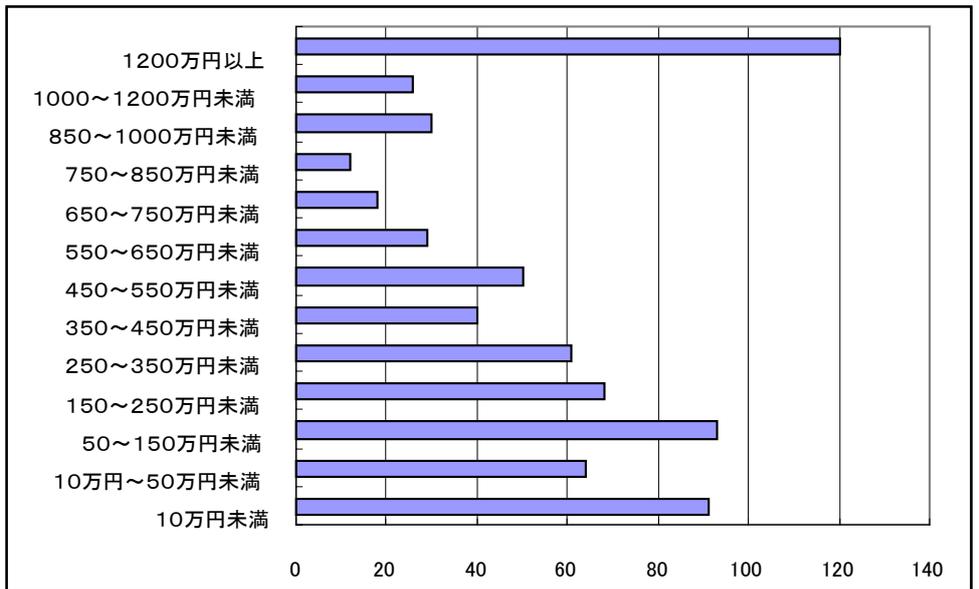
(4) 収入・貯蓄・住宅ローン

世帯収入は 150-250 万円から 1,200 万円以上に至るまで幅広い分布となっている。本人収入が 10 万円未満のほとんどは無職の女性である。貯蓄額は 150 万円以下と 1,200 万円以上と上下に多い分布となっており二極化している。住宅ローンについては 10 万円未満が半数を占めるが、これは持ち家で既に支払いが終わっている層と持ち家でない層が半数程度ずつ含まれている。

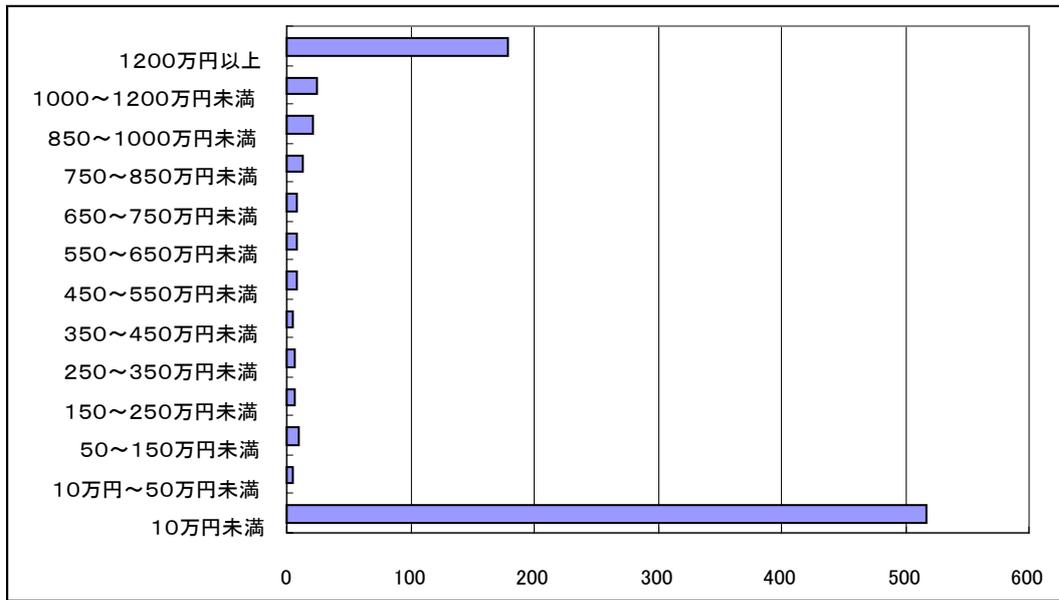
第 2-1-11 図 世帯年収



第 2-1-12 図 貯蓄額



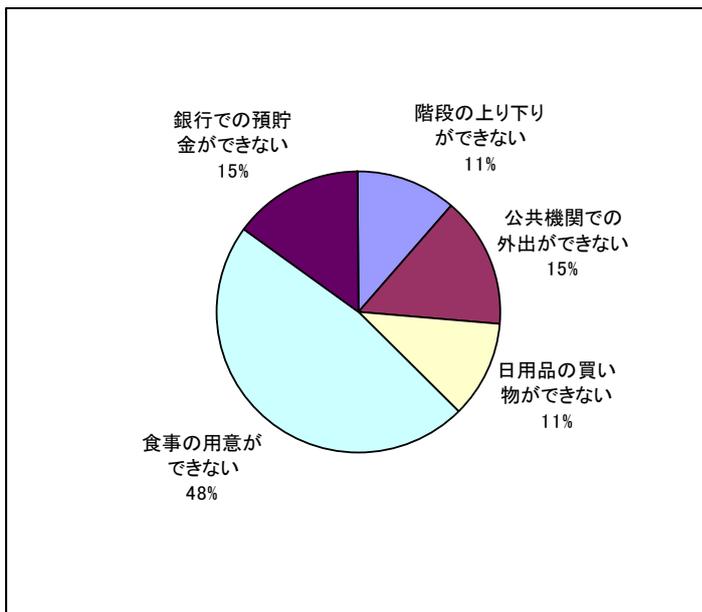
第 2-1-13 図 住宅ローン残高



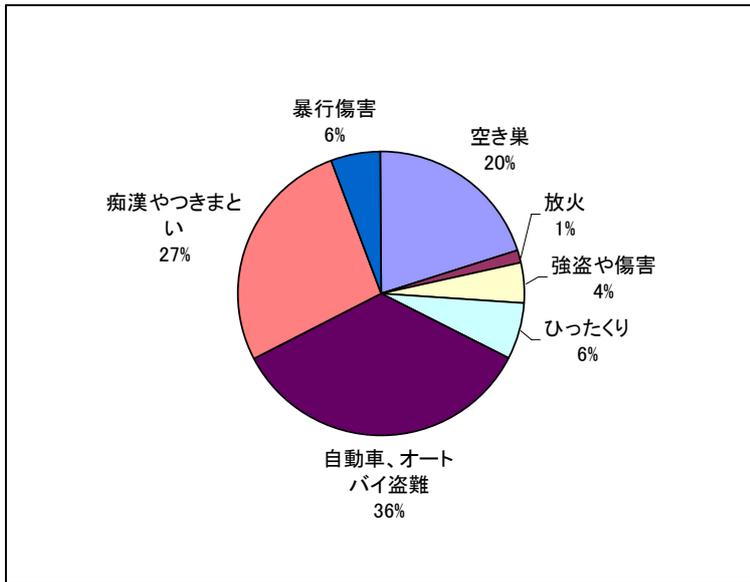
(5) 身体状況・被災経験

日常行動ができない層は 40 人未満である。通院日数は病院に行っていない人が 328 人、5 日未満が 348 人、30 日より多い人が 40 人程度存在する。犯罪被害の経験では、自転車・オートバイの盗難、痴漢・つきまといが最も多い。災害被害の経験では、地震被害の経験者が最も多いが、台風被害の経験者も 172 人存在する。

第 2-1-14 図 日常行動ができない



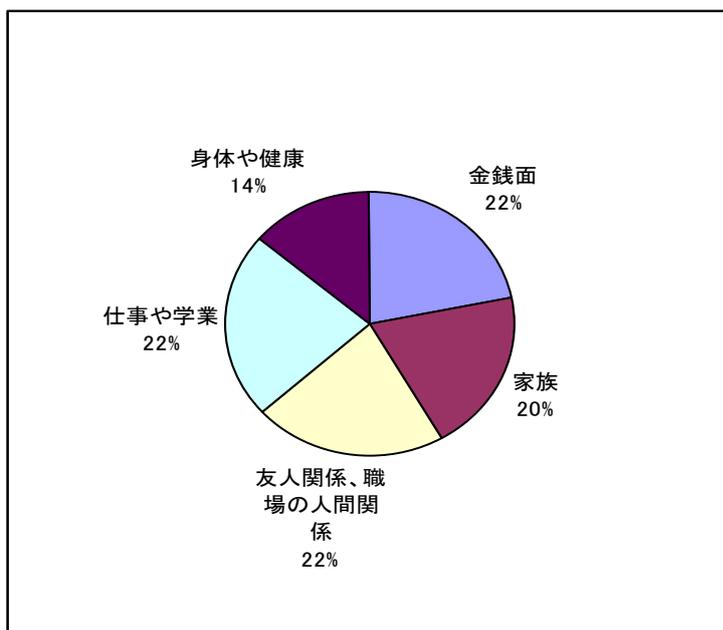
第 2-1-15 図 犯罪被害



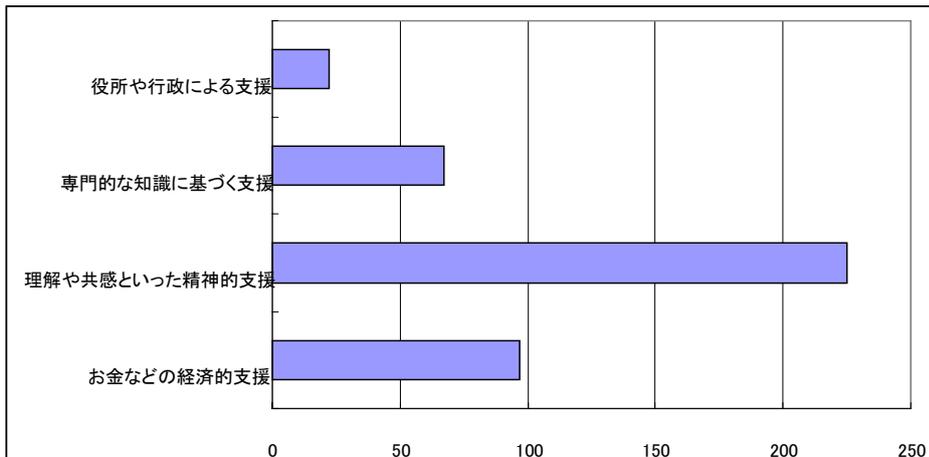
(6) 生きていくのがつらいほどの困難

生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安の経験者は 431 人と半数に上る。望ましい解決方法としては半数が、友人と相談して解決する、を挙げている一方で、一人で解決する、を挙げている人も 223 人存在する。困難の経験内容は仕事や学業が最も多いが、同程度に金銭問題、家族問題、友人・職場の人間関係が含まれており、身体問題は相対的に少ない。困難に対して必要だった支援は理解や共感という精神的支援が最も多く挙げられている。

第 2-1-16 図 困難の内容



第 2-1-17 図 望ましい支援のあり方



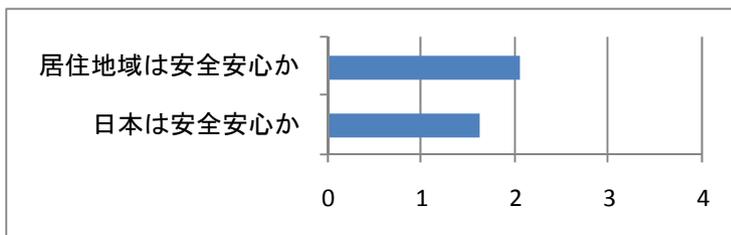
### 3. 主観的データ

#### (1) 安全安心感

主観的データの基本統計量は以下の第 2-1-18 図から第 2-1-24 図の通りである。

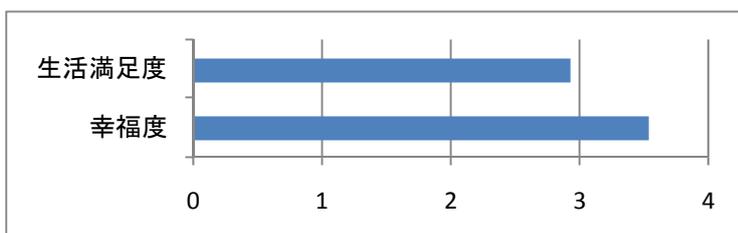
日本の安全安心感では、やや不安の方に振れている一方で、居住地域はやや安心の方に振れている。標準偏差は居住地域の安全安心感のほうが小さい。安全安心感については、値が小さいほど安全安心と感じている。

第 2-1-18 図 安全安心感



幸福度、生活満足度はやや幸福な方に振れている。日本に対する安全安心感はやや低いものの、居住地域の安全安心感はやや高く、幸福度、生活満足度もやや正の方向に確保されていることが確認される。生活満足度、幸福度では、値が大きいほど肯定的な回答になっている。

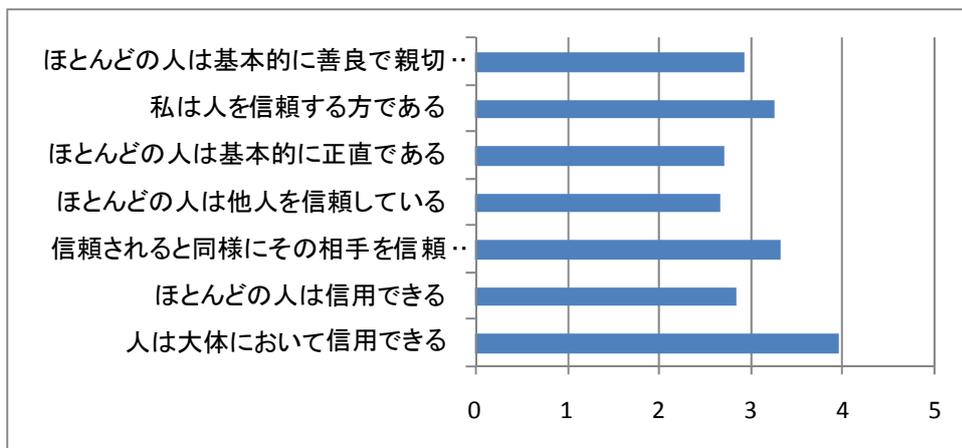
第 2-1-19 図 生活満足度



## (2) 信頼感

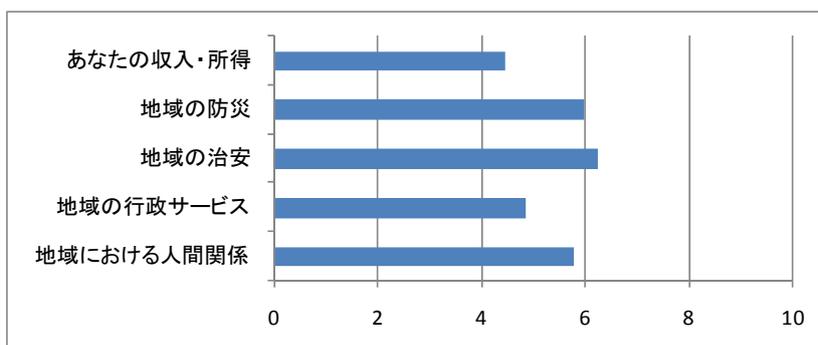
信頼感では、人は大体において信用できるというよりは、用心に越したことはないと回答している。人に信頼されると相手も信頼を返すかという問には、肯定的な回答が多い。ほとんどの人は他人を信頼している、ほとんどの人は基本的に正直であるという問いはどちらとも言えない水準となっている。私は人を信頼する方である、ほとんどの人は基本的に善良で親切である、という問には肯定的な回答が多い。信頼感値が小さいほど信頼感が高いと回答している。

第 2-1-20 図 信頼感

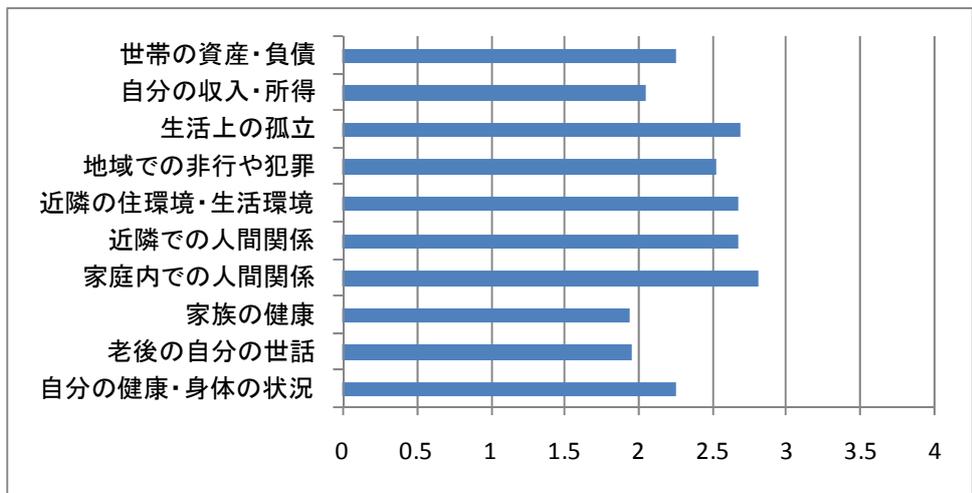


地域の満足度では、地域の治安、地域の防災で満足度が高い一方で、地域の行政サービス、自身の収入所得で満足度が低い。生活における心配事では、老後の自分の世話、家族の健康、自身の収入所得が最も心配な項目として挙がっている。家庭内・近隣の人間関係、近隣の住環境などには楽観的な意見が多い。制度への信頼では、地方行政や司法制度への信頼は高い一方で、警察や公立学校への信頼が相対的に低い。治安の変化については、日本の治安の方が居住地の治安よりもやや悪化していると回答しているが、回答としては変わらないという範囲には収まっている。満足度は値が大きいほど満足していると回答している。信頼度は値が小さいほど信頼していると回答している。

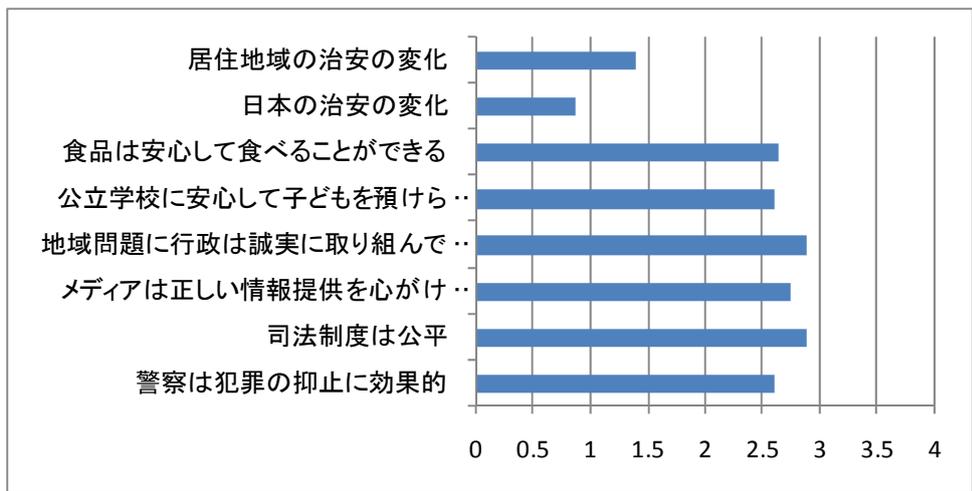
第 2-1-21 図 地域の満足度



第 2-1-22 図 生活における心配事



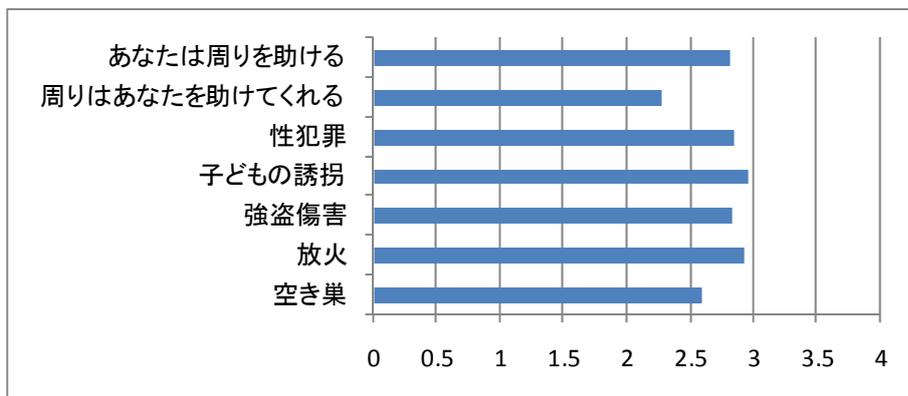
第 2-1-22 図 制度への信頼性



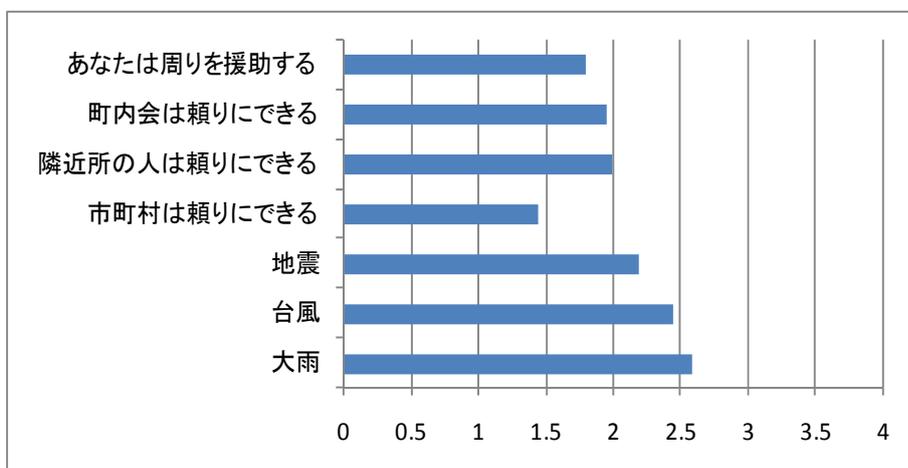
(3) 被害予想

犯罪被害に遭う可能性は、空き巣が第一であり、放火や子どもの誘拐は相対的にあまり心配されていない。犯罪被害に遭った、見かけた場合、自身は周りを助けるつもりがあるが、周りは自身を助けてはくれないという傾向が見られる。災害については地震の被害が相対的に良く想定されている。そして、隣近所や市町村よりも市町村を最も頼りに思っていることが確認される。災害時は行政が最も頼るべき存在として認知されている。この回答では、値が小さいほど、犯罪・災害被害があり得る、特定の主体を頼りにできる、援助すると回答している。

第 2-1-23 図 犯罪被害の予想



第 2-1-24 図 災害被害の予想



### 第 3 章 分析結果

#### 第 1 節 兵庫県民の幸福感、生活満足感、安全安心感の特徴

本研究会が 2007 年度と 2008 年度にかけて、2 度実施した兵庫県民を対象としたインターネット調査データの記述統計を用いて、幸福感、生活満足感、安全安心感の特色について整理してみる。なお、統計付表は本報告書の後ろにまとめて掲載している。

##### 1. 主観的幸福感 (Subjective well-being) の特色

- ① 質問文は、「全体的に言って、現在、あなたは幸せだと思いますか、それともそうは思いませんか。あなたの気持に近い番号をひとつお選びください。」とし、回答の選択肢として、「幸せである」をレベル 5 とし、「幸せではない」をレベル 1 として回答を求めた。
- ② 結果は、第 3-1-1 表のとおりであった。もっとも幸せ度が高いと回答したレベル 5

のグループは、二年間の調査を通じて、約4人に1人であった。幸せ度が次に高いレベル4と回答したグループを足し合わせると、2007年度は57パーセント強に上ったものの、2008年度では、52パーセント強に落ちている。他方、レベル3を中間点（おそらく、幸福でもなく不幸でもないと感じている具ループ）と考えれば、幸せではないと考えているグループ（レベル2とレベル1のグループ）は、両年度ともに約17パーセント程度であった。幸せであると感じている人の方が、幸せではないと感じている人よりも多いといえるだろう。

③ 両年度を通じて、統計的な有意差はみられない。

第3-1-1表：幸福感と調査実施年のクロス表)

			調査実施年		
			2007	2008	合計
幸福感	幸せである	度数	242	237	479
		調査実施年の%	24.2%	23.7%	24.0%
4		度数	330	289	619
		調査実施年の%	33.0%	28.9%	31.0%
3		度数	258	299	557
		調査実施年の%	25.8%	29.9%	27.9%
2		度数	110	117	227
		調査実施年の%	11.0%	11.7%	11.4%
幸せではない		度数	60	58	118
		調査実施年の%	6.0%	5.8%	5.9%
合計		度数	1000	1000	2000
		調査実施年の%	100.0%	100.0%	100.0%

④ 質問の仕方が異なるだけに、比較することは難しいけれども、2000年、2005年に実施された世界価値観調査（World Values Survey: WVS）の日本の調査結果を第3-1-2表に示しておく。この調査結果からも、幸せと回答するグループは、幸せではないと回答するグループよりも多く存在した。ただし、WVSにおいて、幸せであると回答したグループは、86から87パーセントにも上っているのが特徴的である。

第3-1-2表：幸福感（WVS（2000,2005））<sup>2</sup>

	2000	2005
非常に幸せ	27.8%	28.4%

<sup>2</sup>出典：電通総研日本リサーチセンター（2008）『世界主要国価値観データブック』

やや幸せ	58.7%	58.9%
あまり幸せでない	9.9%	8.9%
全く幸せでない	0.6%	1.1%
わからない	3.0%	2.7%

## 2.生活満足感 (Life Satisfaction) スコアの評価

- ① 質問文は、「あなたは今の生活全体にどの程度満足していますか。あなたの気持ちに近い番号をひとつお選びください。」とし、回答の選択肢として、「満足である」をレベル10とし、「不満である」をレベル1として回答を求めた。
- ② 結果は、第3-1-3表、第3-1-4表のとおりであった。スコア8以上の回答を「生活全般に満足である」グループとし、反対に、スコア3以下を「生活全般に不満である」グループに分類してみる。すると、満足グループは、2007年では33パーセント、2008年では30パーセント程度となっており、少し低下している。また、不満グループは、18パーセントから21パーセントに増加している。満足の割合の低下と不満の低下がみられる。
- ③ 両年度を通じて、統計的な有意差はみられない。

第3-1-3表：生活満足感（年度別）  
生活満足感 と 調査実施年 のクロス表

			調査実施年		
			2007	2008	合計
生活満足感	満足である	度数	85	94	179
		調査実施年の%	8.5%	9.4%	9.0%
9		度数	77	64	141
		調査実施年の%	7.7%	6.4%	7.1%
8		度数	171	148	319
		調査実施年の%	17.1%	14.8%	16.0%
7		度数	155	146	301
		調査実施年の%	15.5%	14.6%	15.1%
6		度数	129	103	232
		調査実施年の%	12.9%	10.3%	11.6%
5		度数	129	145	274
		調査実施年の%	12.9%	14.5%	13.7%
4		度数	72	86	158
		調査実施年の%	7.2%	8.6%	7.9%

3	度数	79	95	174
	調査実施年の %	7.9%	9.5%	8.7%
2	度数	37	43	80
	調査実施年の %	3.7%	4.3%	4.0%
不満である	度数	66	76	142
	調査実施年の %	6.6%	7.6%	7.1%
合計	度数	1000	1000	2000
	調査実施年の %	100.0%	100.0%	100.0%

- ④ 本質問項目は、WVS の質問を採用している。そこで、参考までに、WVS の結果を表 4 に示した。
- ⑤ サンプルの取り方などに差異があることから、断定はできないけれども、WVS 調査からは、生活満足度の高いグループが、2000 年から 2005 年にかけて増加し、不満を感じるグループの数は減少している。これは、兵庫県民の調査の動きとは正反対の動きを示している点は注意しておきたい。

第 3-1-4 表：生活満足感（WVS（2000,2005））

	2000	2005
満足である	4.6%	4.6%
9	6.7%	13.3%
8	24.0%	27.5%
7	16.1%	20.0%
6	17.9%	15.6%
5	12.9%	8.4%
4	6.0%	3.5%
3	4.8%	3.7%
2	2.1%	1.1%
不満である	1.6%	0.9%
わからない	3.4%	1.5%
合計	100%	100%

（出典：電通総研 日本リサーチセンター 編（2004、2008））

### 3. 幸福感と満足感の社会属性による平均値

第 3-1-4 表では、付表幸福感、生活満足度、安全安心感（居住地域）、安全安心感（日本）のレベルをいくつかの個人属性によって、グループに分け、その平均値をまとめた。そこから得られた知見は以下の通りである。第 3-1-6 表でそれをまとめている。

- ① 幸福感や生活満足度は男性よりも女性が高い。しかし、安全安心感で見ると、男性の方が安全安心感が高い。
- ② 既婚者の方が未婚者よりも幸福感や満足度が高い。しかし、地域における安全安心感では、既婚者の方が安全安心感に対して、不安を持っているようである。
- ③ 高齢者は、幸福感や生活満足度が高い。
- ④ 転入経験を持つグループの方が、持たないものよりも幸福感や満足度は高い。
- ⑤ 労働契約によって、安定的な契約を持つグループは、そうでないグループに比べて、幸福感や生活満足度が高い。しかし、安全安心感には影響を与えてはいない。
- ⑥ 学歴と幸福感、生活満足度、安全安心感との間には、関係があるようである。学歴が高いと幸福感、満足感、安全安心感ともに高い。
- ⑦ 収入が高いと幸福感、満足感、安全安心感ともに高い。ただし、幸福感では、高収入グループの平均値は、2番目に高収入のグループのそれよりも低くなっている。
- ⑧ 1人暮らしの人の幸福感、生活満足度は低い。
- ⑨ 幸福感や生活満足度では、神戸地域、阪神北地域は高く、丹波地域や但馬地域が低い。しかし、安全安心感で見ると、神戸や阪神北地域は必ずしも高くはなく、淡路が高い。

第3-1-5表：幸福感、生活満足度、安全安心感と属性（概要）

	幸福感	生活満足感	安全安心感（地域）	安全安心感（日本）
性別	女性＞男性	女性＞男性	男性＞女性	男性＞女性
未既婚	既婚＞未婚	既婚＞未婚	未婚＞既婚	あまりかわらない
年代	70代以上高い	60代以上高い	2007年データでは、差異は見られなかったが、2008年では、年齢が上がると、安全安心感が高まっていた。	70代の方が安全安心感が弱いけれども、一概には年代差があるとは言いきれない
転入経験	あり＞なし	あり＞なし	かわりなし	あり＞なし
労働形態	正規・役員・自営・家族従事・パートのグループとアルバイト、派遣、契約、嘱託グループの間に格差。	正規・役員・自営・家族従事・パートのグループとアルバイト、派遣、契約、嘱託グループ	一概には言えない	一概には言えない

		プの間に格差。		
学歴	学歴が高くなると幸福感は高い	短大・大学以上 >高卒	学歴が高いと安全安心感が高い	学歴が高くなると、安全安心感が高まる
世帯収入	収入があがると幸福感は高くなっているが、1200万円の高額所得者が一番幸福感が高いわけではない。	収入があがると生活満足感が高くなっている。	収入が高くなると安全安心感が高くなる。	1000万円以上になると、安全安心感が高い。しかし、1200万以上の収入のあるグループが一番高いわけではない。
一人暮らし	一人暮らしの方が幸福感が低い	一人暮らしの方が生活満足感が低い	一概にはいえない	一人暮らしの方が、安全安心感が高い
居住年数	3-5年居住者グループは低い	3-5年居住者グループは低い	居住年数が長くなれば、安全安心感が高い。ただし、3-5年は、2年以下よりも低い。	居住年数が長くなれば、安全安心感が高い。ただし、3-5年は、2年以下よりも低い。
兵庫県内地域区分(10地区)	神戸、阪神北が高く、丹波、但馬、北播磨が低い	阪神、阪神北が高く、丹波、但馬が低い。	淡路、但馬、北播磨は高く、中播磨、東播磨は低い。	北播磨、淡路地区は高く、丹波、西播磨地区は低い。

#### 4.人を信用するかどうかという信用性向との関係

次に、第3-1-6表、第3-1-7表にて、「人を信用できるかどうか」への質問への回答を見てみる。

- ① 「人をだいたい信用できる」と回答したものは、36.7パーセント(2007年)、41.5%(2008年)であった(表6参照)。ちなみに、WVSでは、39.6%(2000年)、36.6%(2005年)であり、これに比べると、兵庫県民の方が人を信用する割合は高いことがわかる。
- ② 人への信用と幸福感や生活満足感の関係を見たところ、表7が示すように、幸福、満足、安全安心ともに、人を信用するグループは、高い。

第3-1-6表：調査実施年 と 他人の信用 のクロス表

	他人の信用		合計
	だいたい信用できる	用心するにこしたこと	だいたい信用できる

			はない		
調査実施年	2007	度数	367	633	1000
		調査実施年の%	36.7%	63.3%	100.0%
	2008	度数	415	585	1000
		調査実施年の%	41.5%	58.5%	100.0%
合計		度数	782	1218	2000
		調査実施年の%	39.1%	60.9%	100.0%

第3-1-7表: 人への信用性向と幸福感、満足感、安全安心感

他人の信用	幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
だいたい信用できる	3.81	6.62	1.80	2.11
用心するにこしたことはない	3.39	5.55	2.13	2.57
合計	3.56	5.97	2.00	2.39

#### 5. 幸福感や生活満足感と他人との支援援助関係

- ① 第3-1-8表や第3-1-9表は、他人が助けてくれる、あるいは、他人を助けるかどうかに対する回答を用いて、幸福感、満足感、安全安心感の平均値を整理したものである。明らかに、他人を助けた、助けてくれると信じるグループは、幸福、満足、安全安心感が高い。

第3-1-8表: 幸福感 生活満足感 安全安心感 x 他人の支援援助

他人の支援援助	幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
必ず助けてくれる	3.94	6.91	1.48	2.17
たぶん助けてくれる	3.76	6.40	1.83	2.25
助けてくれるかどうか 分からない	3.50	5.87	2.05	2.43
たぶん助けてくれない	3.41	5.55	2.19	2.49
まず助けてくれない	2.72	4.11	2.64	2.97
合計	3.56	5.97	2.00	2.39

第3-1-9表: 幸福感 生活満足感 安全安心感 x 他人への支援援助

他人への支援援助	幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
----------	-----	-------	-----------------	---------------

必ず助ける	3.75	6.27	1.87	2.39
たぶん助ける	3.59	6.02	1.94	2.36
助けるかどうか分からない	3.46	5.84	2.14	2.41
たぶん助けない	3.22	5.29	2.18	2.63
まず助けない	2.90	4.45	2.35	2.85
合計	3.56	5.97	2.00	2.39

## 6.行政、町内会・自治会、近隣者への信頼と幸福、満足、安心安全

次に、第3-1-10表、第3-1-11表、第3-1-12表では、災害時に行政、町内会・自治会、近隣者をどの程度信頼できるかという質問への回答によって、幸福、満足、安全安心の平均値を整理してみた。

- ① 行政への信頼、自治会・町内会への信頼、近隣者への信頼が高いほど、幸福であり、生活に満足であり、安全安心感が高い。
- ② 中でも、近隣者への信頼が高いグループの幸福感、生活満足度の平均値は極めて高い。

第3-1-10表： 幸福感 生活満足感 安全安心感 x 行政への信頼(災害時)

行政への信頼(災害時)		幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
頼りにできる	平均値	3.88	6.74	1.57	1.90
	度数	69	69	69	69
	総合計の%	3.8%	3.9%	2.7%	2.7%
やや頼りにできる	平均値	3.70	6.34	1.88	2.23
	度数	857	857	857	857
	総合計の%	44.5%	45.5%	40.3%	39.9%
あまり頼りにできない	平均値	3.50	5.80	2.08	2.50
	度数	912	912	912	912
	総合計の%	44.9%	44.3%	47.5%	47.6%
頼りにできない	平均値	2.99	4.58	2.36	2.86
	度数	162	162	162	162
	総合計の%	6.8%	6.2%	9.6%	9.7%
合計	平均値	3.56	5.97	2.00	2.39
	度数	2000	2000	2000	2000
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

第3-1-11表: 幸福感 生活満足感 安全安心感 x 町内会・自治会への信頼(災害時)

町内会・自治会への信頼 (災害時)		幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
生活全般への援助期待	平均値	3.54	6.49	1.37	1.94
	度数	35	35	35	35
	総合計の%	1.7%	1.9%	1.2%	1.4%
生活一部への援助期待	平均値	3.74	6.44	1.80	2.26
	度数	429	429	429	429
	総合計の%	22.6%	23.1%	19.3%	20.3%
わからない	平均値	3.60	6.06	1.98	2.35
	度数	1002	1002	1002	1002
	総合計の%	50.7%	50.9%	49.6%	49.2%
あまり期待できない	平均値	3.41	5.60	2.14	2.51
	度数	345	345	345	345
	総合計の%	16.6%	16.2%	18.5%	18.1%
ほとんど期待できない	平均値	3.19	4.99	2.42	2.79
	度数	189	189	189	189
	総合計の%	8.5%	7.9%	11.4%	11.0%
合計	平均値	3.56	5.97	2.00	2.39
	度数	2000	2000	2000	2000
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

第3-1-12表: 幸福感 生活満足感 安全安心感 x 近隣者への信頼(災害時)

近隣者への信頼(災害時)		幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
生活全般への援助期待	平均値	3.95	7.38	1.38	2.05
	度数	40	40	40	40
	総合計の%	2.2%	2.5%	1.4%	1.7%
生活一部への援助期待	平均値	3.77	6.46	1.84	2.27
	度数	487	487	487	487
	総合計の%	25.8%	26.4%	22.4%	23.1%
わからない	平均値	3.59	6.01	1.98	2.37
	度数	978	978	978	978
	総合計の%	49.3%	49.3%	48.4%	48.4%
あまり期待できない	平均値	3.30	5.41	2.16	2.50
	度数	328	328	328	328
	総合計の%	15.2%	14.9%	17.7%	17.1%

ほとんど期待できない	平均値	3.17	5.04	2.41	2.76
	度数	167	167	167	167
	総合計の%	7.5%	7.1%	10.1%	9.6%
合計	平均値	3.56	5.97	2.00	2.39
	度数	2000	2000	2000	2000
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 7.災害時の近隣支援参加と幸福、満足、安全安心

第 3-1-13 表では、災害時に、回答者自身が近隣支援に積極的かどうかということと、幸福、満足、安全安心度との関係を整理してみた。

- ① 積極的に近隣者を支援する気持の高い人ほど、幸福感、満足感、安全安心感のいずれもが高いことが見て取れる。

第3-1-13表:幸福感 生活満足感 安全安心感 x 災害支援への参加度

災害支援への参加		幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
生活全般で援助する	平均値	3.84	6.98	1.77	2.36
	度数	81	81	81	81
	総合計の%	4.4%	4.7%	3.6%	4.0%
生活一部で援助する	平均値	3.64	6.16	1.97	2.36
	度数	1456	1456	1456	1456
	総合計の%	74.6%	75.1%	71.6%	71.9%
あまり援助しない	平均値	3.32	5.32	2.11	2.45
	度数	407	407	407	407
	総合計の%	19.0%	18.1%	21.5%	20.8%
ほとんど援助しない	平均値	2.64	4.25	2.38	2.80
	度数	56	56	56	56
	総合計の%	2.1%	2.0%	3.3%	3.3%
合計	平均値	3.56	5.97	2.00	2.39
	度数	2000	2000	2000	2000
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 8.困難の経験の有無

第 3-1-14 表では、困難な経験の有無と幸福、満足、安全安心の関係を整理した。

- ① 困難を経験したグループは、幸福度、満足度、安全安心度のいずれの点において、経験していないグループよりも低い。

第3-1-14表: 幸福感 生活満足感 安全安心感 x 困難の経験

困難の経験		幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
ある	平均値	3.24	5.11	2.02	2.52
	度数	431	431	431	431
	総合計の%	39.6%	37.6%	45.0%	45.6%
ない	平均値	3.75	6.42	1.87	2.28
	度数	569	569	569	569
	総合計の%	60.4%	62.4%	55.0%	54.4%
合計	平均値	3.53	5.86	1.94	2.38
	度数	1000	1000	1000	1000
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

#### 9. 困難に会った際の相談相手の有無

第3-1-15表では、困難にぶつかったときに、相談相手がいるかどうかということと幸福、満足の関係を整理した。

- ① 相談相手を持っている人は、持っていない人よりも幸福感、満足感が高い。

第3-1-15表: 幸福感 生活満足感 安全安心感 x 相談相手の有無

相談相手の有無		幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
はい	平均値	3.78	6.35	1.92	2.35
	度数	662	662	662	662
	総合計の%	71.0%	71.7%	65.5%	65.4%
いいえ	平均値	3.03	4.90	1.98	2.44
	度数	338	338	338	338
	総合計の%	29.0%	28.3%	34.5%	34.6%
合計	平均値	3.53	5.86	1.94	2.38
	度数	1000	1000	1000	1000
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 10. 困難の際、望まれた支援内容の種類

第 3-1-16 表では、困難の際、望まれた支援の種類と幸福、満足、安全安心の関係を整理してみた。

- ① 経済的支援を求めるグループの幸福感、満足度は低い。
- ② 精神的な支援や行政の支援を求めるグループの幸福感、満足度は高い。
- ③ 役所や行政の支援を望んだグループは、安全安心度がやや低いグループである。

第3-1-16表: 幸福感 生活満足感 安全安心感(居住地域) 安全安心感(日本) × 望まれた支援

困難－望まれた支援		幸福感	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
経済的支援	平均値	2.85	4.24	2.09	2.69
	度数	97	97	97	97
	総合計の%	19.8%	18.7%	23.3%	24.0%
精神的支援	平均値	3.41	5.50	1.99	2.44
	度数	225	225	225	225
	総合計の%	54.9%	56.2%	51.3%	50.4%
専門的知識支援	平均値	3.19	5.22	1.91	2.45
	度数	67	67	67	67
	総合計の%	15.3%	15.9%	14.7%	15.1%
役所や行政支援	平均値	3.50	4.91	2.09	2.55
	度数	22	22	22	22
	総合計の%	5.5%	4.9%	5.3%	5.1%
その他	平均値	3.15	4.80	2.35	2.95
	度数	20	20	20	20
	総合計の%	4.5%	4.4%	5.4%	5.4%
合計	平均値	3.24	5.11	2.02	2.52
	度数	431	431	431	431
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 11. 自身の健康状況

第 3-1-17 表では、健康状況の主観評価をもとにして、幸福、満足、安全安心との関係を整理してみた。

- ① 健康であると感じている人は、幸福度、安全安心感ともにとっても高い。
- ② 反対に、健康状態の思わしくない人は、幸福感が低く、国への安全安心感、地域の安全安心感ともに低い。

- ③ 生活満足度に関しては、健康ではないと回答したグループのみ、幸福とは異なる動きをしている。

第3-1-17表:幸福 生活満足感 安全安心感 x 自分の健康状況

自身の健康状況		幸福	生活満足感	安全安心感 (居住地域)	安全安心感 (日本)
とても健康	平均値	4.02	7.07	1.74	2.16
	度数	107	107	107	107
	総合計の%	12.2%	12.9%	9.6%	9.7%
人並みに健康	平均値	3.63	6.03	1.90	2.35
	度数	654	654	654	654
	総合計の%	67.2%	67.4%	64.2%	64.5%
あまり健康ではない	平均値	3.07	4.74	2.07	2.53
	度数	200	200	200	200
	総合計の%	17.4%	16.2%	21.3%	21.2%
健康とは言えない	平均値	2.92	5.28	2.41	2.82
	度数	39	39	39	39
	総合計の%	3.2%	3.5%	4.9%	4.6%
合計	平均値	3.53	5.86	1.94	2.38
	度数	1000	1000	1000	1000
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 12.不安（一番）の種類と幸福、満足、安全安心

第3-2-18表では、一番の不安と幸福、満足、安全安心の間の関係についてみてみた。

- ① 幸福度の高い人が感じる不安：地域学校教育、全国の治安、防犯体制、食の安全
- ② 幸福度の低い人が感じる不安：地域防犯体制、家庭内の人間関係、生活上の孤立
- ③ 生活満足度の高い人が感じる不安：地域学校教育、全国の治安、防犯体制、食の安全
- ④ 生活満足度の低い人が感じる不安近隣の住環境・生活環境、家庭内人間関係、収入・所得
- ⑤ 安全安心感（地域）の高い人が感じる不安：生活上の孤立、家族の健康、メディアの報道姿勢
- ⑥ 安全安心感（地域）の低い人が感じる不安：近隣の住環境・生活環境、地域の人間関係、地域防犯体制、警察の防犯体制

第3-1-18表:幸福 生活満足感 安全安心感 x 一番目の不安

一番目の不安	幸福	生活満足感	安全安心感	安全安心感
--------	----	-------	-------	-------

			(居住地域)	(日本)
近隣の住環境・生活環境	3.55	<b>5.00</b>	<b>2.20</b>	<b>2.75</b>
地域における人間関係	3.04	5.12	<b>2.20</b>	2.48
居住地域の治安	3.59	5.88	2.06	2.47
地域行政サービス	3.61	6.17	2.09	<b>2.61</b>
地域防災体制	<b>3.00</b>	5.25	<b>2.13</b>	<b>1.88</b>
地域学校教育環境	<b>4.15</b>	<b>7.25</b>	2.00	2.15
自分の収入・所得	3.09	<b>4.65</b>	1.97	2.48
世帯の資産・負債	3.57	5.25	1.98	2.54
自分の健康・身体状況	3.44	6.18	1.88	2.25
老後の自分の世話	3.51	6.09	1.92	2.38
家族の健康	3.85	6.50	<b>1.83</b>	2.23
家庭内での人間関係	<b>2.83</b>	<b>4.50</b>	2.13	2.58
生活上の孤立	<b>3.00</b>	5.10	<b>1.70</b>	2.30
日本全国の治安	<b>4.02</b>	<b>6.96</b>	1.93	<b>2.63</b>
警察の防犯体制	<b>4.00</b>	<b>7.14</b>	<b>2.14</b>	2.29
司法制度の公平性	3.71	6.76	1.94	2.53
メディアの報道姿勢	3.69	6.17	<b>1.80</b>	2.34
食の安全	<b>4.02</b>	<b>7.15</b>	1.85	2.31
大雨・台風・地震による自然災害	3.72	6.25	1.83	2.28
その他	3.29	4.59	1.94	2.65
とくにない	3.68	6.57	1.91	2.10
合計	3.53	5.86	1.94	2.38

### 13.コメント

幸福や満足といった主観評価は、総合的に個々の生活状況の判定と解釈でき、縦割りの客観指標の弱点を補う。

- ① 幸福感、生活満足感、安全安心感という主観的生活状況評価と、客観的な状況評価（個人属性、人々との関係性（社会関係性）、信頼関係、助けあい活動の積極性との関係性など）との関連性が高いことが見て取れた。この点を検証するために、多重回帰分析を行うことが望ましい。
- ② 兵庫県の地区によって幸福感や生活満足感のレベルが異なることが明らかになった。地区ごとに、幸福感と満足感の経年変化を同一回答者から把握していくことができれば、幸福感や生活満足感を高めるために行政が施策を立てて、それらを実施することで、はたして、住民の幸福感や満足感が上昇していくのかどうかを追跡していくことができる。

## 第2節 安全安心感と諸要因の因果構造

### 1. 共分散構造分析

以下では、2007年度「安全安心の意識を支える社会的信頼システムのあり方」報告書の調査データと本調査のデータを合算し、安全安心感、信頼感、生活満足度など諸要因がどのような因果構造を持っているのか、共分散構造分析を行い明らかにした結果について観察する。因果図については別添の第3-2-1図の通りである。得られた知見は以下の6つである。

- ① モデルの適合は、自由度 20、カイ二乗値 13.93 と極めてよく、また適合度指標もほとんどパーフェクトフィットに近い値をしめしている。図に示したモデルで実際に計測された相関係数行列がほぼ完全に再現できるといってよい。このためモデルの信頼度は、前年度の同様の推定結果に比べて格段に上昇したといえる。
- ② モデルの構成は、2007年度モデルを基本として作成しており、さらに修正指数を参考にモデルの適合が良くなるように構成している。ちなみに、2007年度のモデル構成にあたっては、双方向の矢印が想定できる場合に、両者を考慮し、よりよいモデルとなるように探索的に分析を行っている。2007年度のモデルを基本として、今回のモデルを構成し、前述①のようなきわめて高い適合度を持つモデルが構成されたことは、このモデルの因果方向が統計的に支持されていると想定できる。
- ③ 図の黒い矢印は 2007年度モデルと同じ因果パスであり、赤い矢印は新たに今回のモデル構成で見出された因果パスである。モデルの係数はすべて5%水準で有意である。黒い矢印については、係数に幾分かの変化があるものの、全体としてほとんど大きな変化はなく、また符号も完全に一致している。
- ④ 赤いパスについては、以下の新しい知見が得られた。第一に、現在の居住地域に関する安全安心感にたいして行政を含む「制度への信頼感」が正の効果をもち、行政など社会制度に対する信頼が安心した生活の基礎となっていることが示された。第二に、「近隣への信頼」に対して「災害時の行政への信頼」が正の効果を有しており、居住地地域の人々への信頼は、行政のサポートへの一般的な信頼感が基礎になっていると解釈できる。犯罪そのものへの行政のサポートではなく、日常生活および近隣との関係のすべてを揺るがすような大災害において、行政が地域機能の維持・回復に対して責任ある、かつ有効な行動をしてくれるという期待が、犯罪などへの他者の協力的行動を期待する基礎になっているといえる。第三に、このような「近隣への信頼」は「災害時の町内会への信頼」を正に規定しており、行政への信頼が弱い効果ながら、間接効果としても「災害時への町内会の信頼」を促進していることがわかる。

- ⑤ 本分析は2007年度調査よりもサンプル数が多く、2008年度調査はまた兵庫県内居住者をより代表するように注意して設計されている。このような調査において、2007年度の結論が再現されたばかりでなく、行政への信頼が、地域の生活の安心間の基礎となること、また、行政への信頼が地域生活への信頼感を高めることがより一層明確化された。行政への信頼感、それも災害など大規模被害を住民におよぼすような事態における行政への信頼感が、兵庫県民の安心した生活を促進する上で極めて重要な位置を占めることが分かる。
- ⑥ 2007年度結論と今回の結論を合わせて考えると、人々の安心感は、地域への信頼感を基礎とし、地域への信頼感は、行政や制度への信頼感を基礎とするといえる。そして、そのような行政への信頼感は、他者一般への信頼感がつくられることで上昇していく。このような好循環をもたらすためには、政策的に操作できる変数を識別していく必要があるが、一般的他者に対する信頼の情勢は一般に困難な課題が多いとされているから、行政が上記を認識したうえで、住民の信頼感を獲得し、またそれが継続するような実質的な「信頼性」ある組織づくり、政策策定を行うことが緊要である。

### 第3-2-1 図 安全安心感、信頼感 因果構造図

エラー! 編集中のフィールド コードからは、オブジェクトを作成できません。

#### 2. 順序プロビットモデル

ここでは順序プロビットモデルにより、居住地の安全安心感と災害時の行政への信頼、一般的信頼の関係を、客観変数をコントロールした上で、2008年度調査における兵庫県全体、阪神間、播磨、丹波、淡路の各サンプル毎の結果について観察する。コントロール変数には、年齢階層ダミー、性別ダミー、学歴ダミー、主観的健康度ダミー、世帯収入・世帯収入ダミー、負債の負担感ダミー、重要な変数として、一般的信頼ダミー、災害時の行政への信頼ダミー、を採用する。第3-2-1表の(1)式では、コントロール変数に世帯収入と負担感ダミーを入れない推定結果、(2)式では世帯収入ダミーと負担感ダミーを入れた結果、(3)式では、世帯収入と負担感ダミーを入れた結果を掲載している。推定結果は最小二乗法、順序プロビットモデルの両方を掲載している。上記の因果構造図で確認される通り、一般的信頼、災害時の行政への信頼が高いほど、居住地・日本の安全安心感は高まっていると考えられる。順序プロビットモデルの結果より、災害時の行政への信頼、一般的信頼の係数の方向について議論する。なお、本推定では、一般的信頼ダミーのうち、用心するに越したことはないダミー、災害時の行政への信頼ダミーのうち、災害時に行政は頼りにできないダミーを落とした推定を行っている。播磨、淡路サンプルでは最尤法による推定が収束しなかった。阪神間のデータでは、(1)式のOLS推定結果でF値は有意水準10%でも有意ではなかった。丹波では、(2)式の順序プロビット推定で推定が収束しなかった。収入を回答していないサンプルが欠値となっているため、(2)式、(3)式でのサンプル数が(1)式よりも少なくなっている。以下では、兵庫県全体、阪神間、丹波の結果について概観する。

兵庫県全体の結果では、一般的信頼、災害時の行政への信頼が高いほど、居住地の安全安心感が引き上げられている様子が確認される。これは経済変数や負担感のコントロールの有無に関わ

らず、係数と有意性に大きな違いは認められない。一般的信頼、災害時の行政への信頼が高いグループは、居住地の安全安心感も高いことが改めて認められる。居住地の安全安心感については、世帯収入ダミーは有意水準 5%で有意だが、負担感ダミーは有意水準 10%でも有意ではない。

阪神間の結果では、一般的信頼は有意水準 1%で有意な結果となったが、災害時の行政への信頼は(3)式の順序プロビットモデルの結果において有意水準 5%で有意となっている。

丹波の結果では、やはり一般的信頼は有意水準 1%で有意な結果となったが、災害時の行政への信頼は(1)式では、やや頼りにできる、頼りにできるが有意水準 1%で有意、(3)式の順序プロビットモデルの結果においては、頼りにできる、が有意水準 1%で有意となっている。

以上より、得られた知見は以下の通りである。

- ① 兵庫県全体で見れば、居住地の安全安心感、日本の安全安心感に対して、災害時の行政への信頼、一般的信頼が、世帯収入や負担感などの影響を考慮した上でも、正の影響を与えていることが確認される。
- ② 阪神間、丹波とも一般的信頼は居住地の安全安心感に正の影響を与えているが、災害時の行政の対応では、丹波地方において有意に居住地の安全安心感を引き上げている。
- ③ 世帯収入は有意である場合とそうでない場合がある。また、世帯収入ダミーが有意に影響を与えている場合、多重共線性が疑われる結果となっている為、居住地の安全安心感に強い影響を持っているとは言えない。

第 3-2-1 表 居住地・日本の安全安心感と一般的信頼、災害時の行政への信頼

被説明変数：居住地の安全安心感		(1)		(2)		(3)	
		OLS	OPROBIT	OLS	OPROBIT	OLS	OPROBIT
兵庫全体	一般的信頼						
	だいたい信用できる	-0.229*** (0.039)	-0.48*** (0.08)	-0.232*** (0.043)	-0.493*** (0.089)	-0.237*** (0.043)	-0.498*** (0.088)
	災害時の行政への信頼						
	頼りにできる	-0.532*** (0.115)	-1.116*** (0.242)	-0.534*** (0.123)	-1.1*** (0.259)	-0.533*** (0.123)	-1.094*** (0.256)
	やや頼りにできる	-0.229*** (0.075)	-0.426*** (0.151)	-0.227*** (0.084)	-0.407** (0.168)	-0.237*** (0.083)	-0.426*** (0.166)
	あまり頼りにできない	-0.105 (0.074)	-0.162*** (0.147)	-0.095 (0.082)	-0.116 (0.164)	-0.104 (0.082)	-0.141 (0.162)
	世帯収入ダミー			○	○	-	-
	世帯収入					-	-
	負担感ダミー			-	-	-	-
	Adj R2	0.123		0.142		0.136	
	LR	156.170		169.550		151.330	
	サンプル数	1000	1000	854	854	854	854
		(2)		(3)			
		OLS	OPROBIT	OLS	OPROBIT		
阪神間	一般的信頼						
	だいたい信用できる	-0.314*** (0.077)	-0.74*** (0.177)	-0.312*** (0.074)	-0.726*** (0.168)		
	災害時の行政への信頼						
	頼りにできる	-0.303 (0.247)	-0.788 (0.573)	-0.433* (0.24)	-1.088** (0.552)		
	やや頼りにできる	0.097 (0.17)	0.214 (0.379)	-0.006 (0.165)	-0.018 (0.359)		
	あまり頼りにできない	0.25 (0.166)	0.586 (0.37)	0.169 (0.162)	0.38 (0.353)		
	世帯収入ダミー	-	○				
	世帯収入			-	-		
	負担感ダミー	-	-	-	-		
	Adj R2	0.160		0.151			
	LR	81.760		69.440			
	サンプル数	263	263	263	263		
		(1)		(3)			
		OLS	OPROBIT	OLS	OPROBIT		
丹波	一般的信頼						
	だいたい信用できる	-0.183*** (0.076)	-0.38** (0.149)	-0.189** (0.087)	-0.379** (0.165)		
	災害時の行政への信頼						
	頼りにできる	-0.636*** (0.21)	-1.255*** (0.42)	-0.637*** (0.225)	-1.262*** (0.439)		
	やや頼りにできる	-0.33** (0.147)	-0.543** (0.277)	-0.268 (0.164)	-0.415 (0.299)		
	あまり頼りにできない	-0.203 (0.146)	-0.269 (0.272)	-0.173 (0.161)	-0.211 (0.293)		
	世帯収入ダミー						
	世帯収入			○	○		
	負担感ダミー			-	-		
	Adj R2	0.1452		0.1687			
	LR	68.79		71.36			
	サンプル数	300	300	253	253		

\*\*\*：有意水準1%で有意、\*\*：有意水準5%で有意、\*：有意水準10%で有意。

### 第3節 行政区別、地域別、居住地域別の安全安心感、幸福感、生活満足度、行政へ

## の信頼感、日常生活の不安

本調査では、市町村別、居住地域別のデータを幅広く集めることができた。以下では、行政区別、地域別、居住地域別の安全安心感、幸福感、生活満足度、行政への信頼感の特徴について記述する。行政区別、地域別、居住地域別の分布表と、行政区別、地域別については兵庫県の分布マップを掲載する。ここで言う行政区とは、阪神間、播磨、丹波、淡路島を指し、居住地域とは、工場の多い地域、商店事業所の多い地域、主に古くからの住宅地（戦前からの住宅地）、主に新興住宅地（戦後できたニュータウンを含む）、農村漁村、を指す。市町別のデータについては、後ろの統計付録に掲載しておく。

### 1. 行政区別

第 3-4-1 表では、行政区画別に重要な主観的データを観察していく。ここで、重要な主観的データとは、居住地域は安全安心か（以下、居住地域の安全安心）、日本は安全安心か（以下、日本の安全安心）、幸福感、生活満足度、一般的に人は信頼できるか（以下、一般的信頼感）、地震や台風などの自然災害で住居に大きな被害を受け避難しなければならなくなったときに自分たちの生活の回復のうえで市町村（行政）はどの程度頼りにする事ができるか（以下、災害時の行政への信頼）、地域で問題が起こったとき行政は誠実にその解決に当たってくれるか（以下、地域問題への行政の信頼）、を指す。

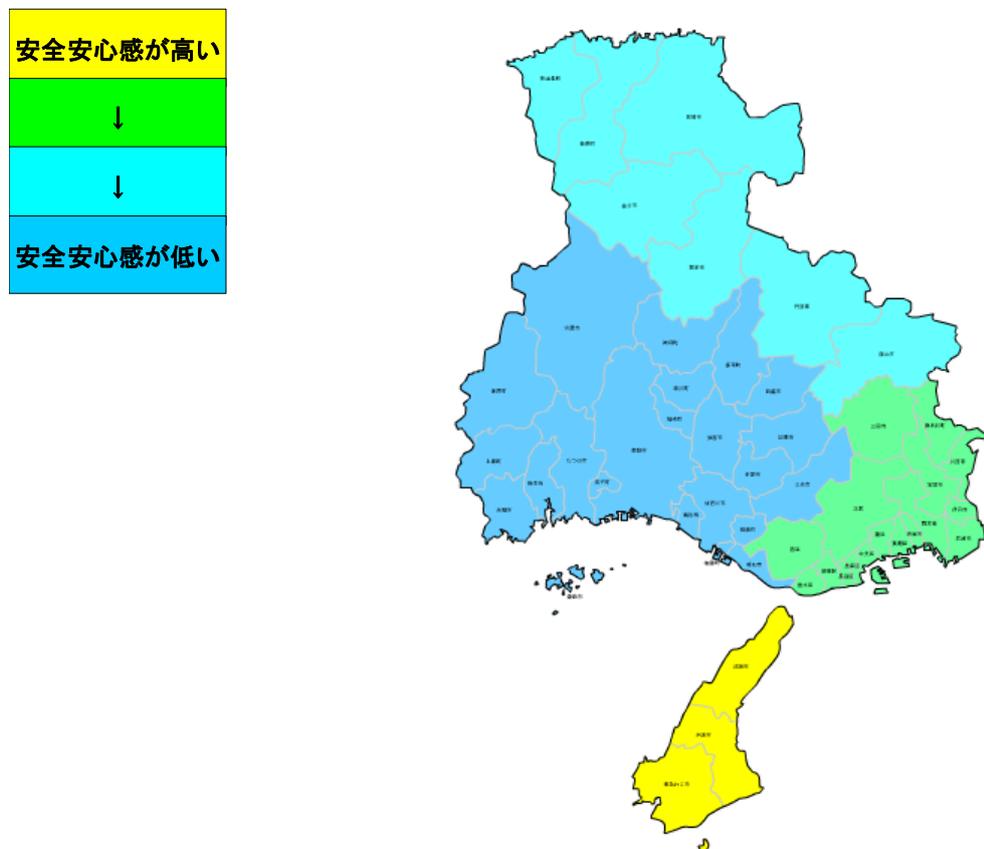
居住地域の安全安心感、日本の安全安心感と共に、生活満足度のマップについて、第 3-4-1 図、第 3-4-2 図、第 3-4-3 図にて掲載しておく。第 3-4-4 図では、居住地域の安全安心感と日本の安全安心感のギャップを示したマップを掲載している。図中の色分けは、第 1 グループはスコアが最も高かったグループ、第 4 グループはスコアが最も低かったグループを指す。居住地域と日本の安全安心感のギャップとは、居住地域の安全安心感の値と日本の安全安心感の値の差分を指し、居住地域の安全安心感のスコアが日本の安全安心感のスコアを上回る場合が無かった為、その絶対値が最も大きいグループを第 1 グループ、スコアの差の絶対値が一番小さかったグループを第 4 グループとした。

居住地域の安全安心感には播磨がやや低く、淡路が高い。日本の安全安心感には丹波が低く、淡路が高いが、阪神間・播磨・淡路に大きな違いは見られない。居住地域の安全安心感よりも日本の安全安心感には総じて低い。幸福感、生活満足度では阪神間が高い結果となっている。一般的信頼感には大きな違いは各行政区で大きな違いは見られない。災害時の行政への信頼感には播磨で低く、丹波で高い。地域問題への行政の信頼は阪神間が低くなっている。大きい点としては、淡路島の居住地域における安全安心感が高いこと、阪神間の生活満足度が高い点が挙げられる。

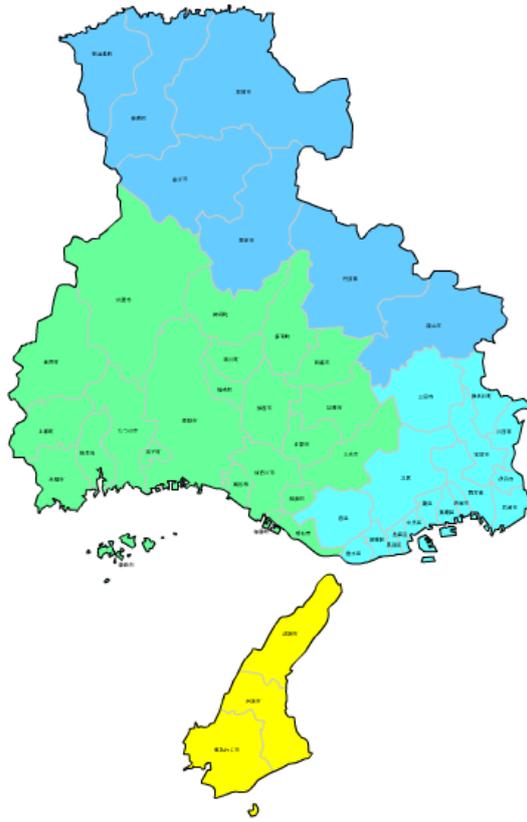
第 3-4-1 表 行政区別 主観的データ分布

		居住地域				日本			
サンプル		平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
阪神間	300	1.95	0.60	1	4	2.36	0.81	1	4
播磨	300	2.00	0.59	1	4	2.38	0.77	1	4
丹波	300	1.90	0.66	1	4	2.44	0.86	1	4
淡路	100	1.83	0.60	1	4	2.32	0.82	1	4
幸福感					生活満足度				
サンプル		平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
阪神間	300	3.62	1.15	1	5	6.24	2.57	1	10
播磨	300	3.53	1.17	1	5	5.86	2.60	1	10
丹波	300	3.44	1.14	1	5	5.58	2.59	1	10
淡路	100	3.55	1.02	1	5	5.55	2.56	1	10
一般的信頼感					災害時				
サンプル		平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
阪神間	300	1.57	0.50	1	2	2.53	0.68	1	4
播磨	300	1.59	0.49	1	2	2.63	0.66	1	4
丹波	300	1.59	0.49	1	2	2.50	0.72	1	4
淡路	100	1.60	0.49	1	2	2.60	0.72	1	4
地域問題									
サンプル		平均値	標準偏差	最小値	最大値				
阪神間	300	2.95	0.72	1	4				
播磨	300	2.85	0.70	1	4				
丹波	300	2.86	0.74	1	4				
淡路	100	2.84	0.72	1	4				

第 3-4-1 図 行政区別 居住地域の安全安心感



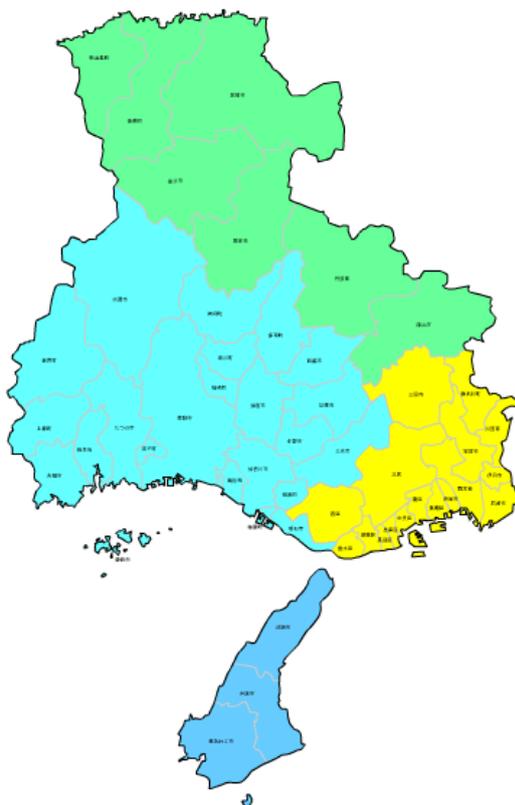
第 3-4-2 図 行政区別 日本の安全安心感



第 3-4-3 図 行政区別 居住地域と日本の安全安心感ギャップ



第 3-4-4 図 行政区別 生活満足度



## 2. 地域別

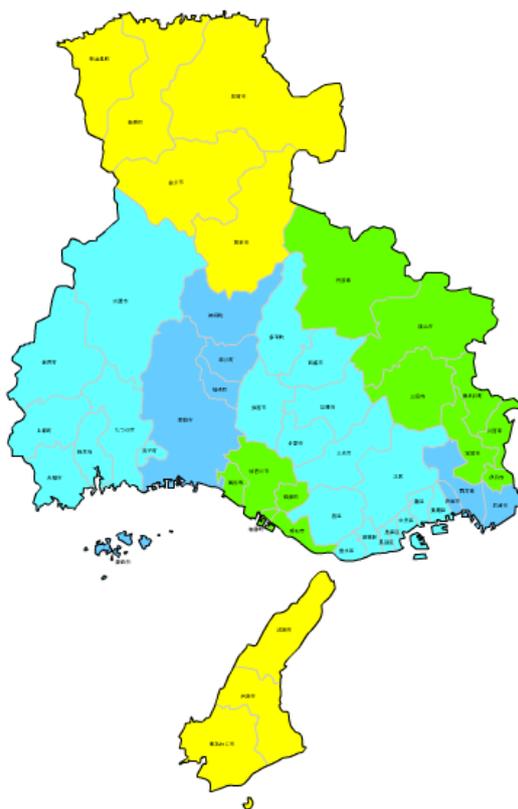
第 3-4-2 表では、地域別に重要な主観的データについて観察する。ここで地域とは、兵庫県民局管轄単位の神戸、阪神南、阪神北、東播磨、北播磨、中播磨、西播磨、但馬、丹波、淡路を指す。居住地域の安全安心感、日本の安全安心感と共に、安全安心感のギャップ、生活満足度、地域問題に対する行政への信頼マップについて、第 3-4-5 図、第 3-4-6 図、第 3-4-7 図、第 3-4-8 図、第 3-4-9 図にて掲載しておく。

居住地における安全安心感は淡路島、但馬が高くなっている。中播磨、阪神南は低い。日本の安全安心感は北播磨が高く、丹波が低い。幸福感、生活満足度は阪神北、神戸が高く、西播磨、丹波が低い。一般的信頼感は西播磨が高く、丹波が低い。災害時の行政への信頼は但馬が高く、東播磨が低い。地域問題に対する行政への信頼は、北播磨が高く、神戸が低い。

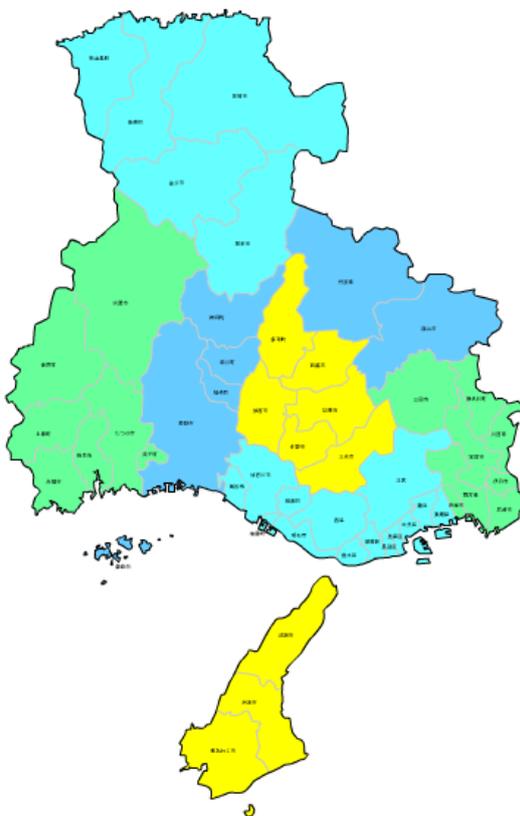
第 3-4-2 表 地域別 主観的データ分布

サンプル数	居住地				日本				
	平均値	標準偏差	＋ 最小値	－ 最大値	平均値	標準偏差	＋ 最小値	－ 最大値	
神戸	144	1.917	0.573	1	4	2.347	0.822	1	4
阪神南	101	2.020	0.648	1	4	2.366	0.784	1	4
阪神北	55	1.927	0.573	1	4	2.364	0.847	1	4
東播磨	138	2.007	0.560	1	3	2.362	0.704	1	4
北播磨	25	1.920	0.493	1	3	2.280	0.678	1	4
中播磨	97	2.031	0.620	1	4	2.412	0.826	1	4
西播磨	40	1.925	0.656	1	3	2.400	0.900	1	4
但馬	188	1.851	0.677	1	4	2.330	0.851	1	4
丹波	112	1.973	0.636	1	4	2.625	0.840	1	4
淡路	100	1.830	0.604	1	4	2.320	0.815	1	4
サンプル数	幸福感				生活満足度				
	平均値	標準偏差	－ 最小値	＋ 最大値	平均値	標準偏差	－ 最小値	＋ 最大値	
神戸	144	3.653	1.185	1	5	6.340	2.624	1	10
阪神南	101	3.545	1.153	1	5	6.129	2.517	1	10
阪神北	55	3.655	1.058	1	5	6.164	2.559	1	10
東播磨	138	3.536	1.185	1	5	5.884	2.664	1	10
北播磨	25	3.520	1.122	1	5	6.360	2.644	1	10
中播磨	97	3.598	1.143	1	5	5.866	2.503	1	10
西播磨	40	3.325	1.269	1	5	5.425	2.611	1	10
但馬	188	3.479	1.144	1	5	5.691	2.641	1	10
丹波	112	3.375	1.140	1	5	5.384	2.509	1	10
淡路	100	3.550	1.019	1	5	5.550	2.560	1	10
サンプル数	一般的信頼感				災害時				
	平均値	標準偏差	＋ 最小値	－ 最大値	平均値	標準偏差	＋ 最小値	－ 最大値	
神戸	144	1.597	0.492	1	2	2.514	0.709	1	4
阪神南	101	1.525	0.502	1	2	2.515	0.673	1	4
阪神北	55	1.564	0.501	1	2	2.618	0.623	1	4
東播磨	138	1.630	0.484	1	2	2.688	0.681	1	4
北播磨	25	1.560	0.507	1	2	2.520	0.653	1	4
中播磨	97	1.619	0.488	1	2	2.588	0.673	1	4
西播磨	40	1.425	0.501	1	2	2.625	0.586	2	4
但馬	188	1.543	0.500	1	2	2.431	0.753	1	4
丹波	112	1.670	0.472	1	2	2.625	0.631	1	4
淡路	100	1.600	0.492	1	2	2.600	0.725	1	4
サンプル数	地域問題								
	平均値	標準偏差	＋ 最小値	－ 最大値					
神戸	144	3.056	0.727	1	4				
阪神南	101	2.851	0.726	1	4				
阪神北	55	2.873	0.668	1	4				
東播磨	138	2.906	0.661	2	4				
北播磨	25	2.760	0.723	2	4				
中播磨	97	2.845	0.755	1	4				
西播磨	40	2.725	0.679	2	4				
但馬	188	2.846	0.762	1	4				
丹波	112	2.884	0.694	1	4				
淡路	100	2.840	0.721	1	4				

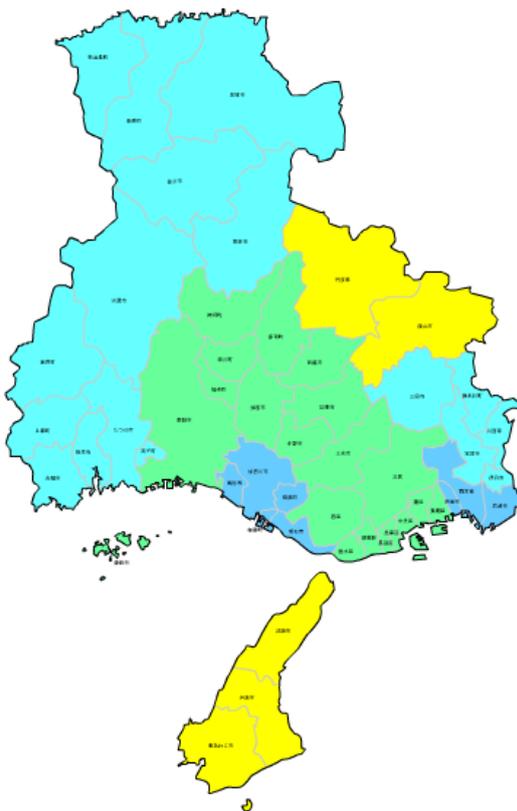
第 3-4-5 図 地域別 居住地の安全安心感



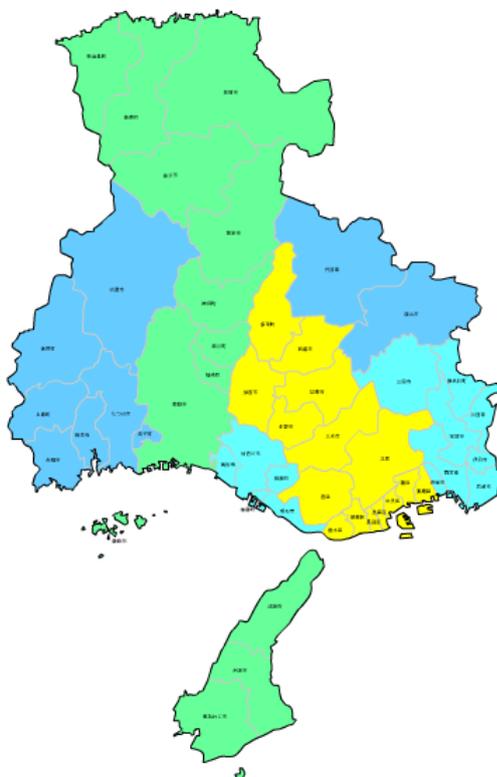
第 3-4-6 図 地域別 日本の安全安心感



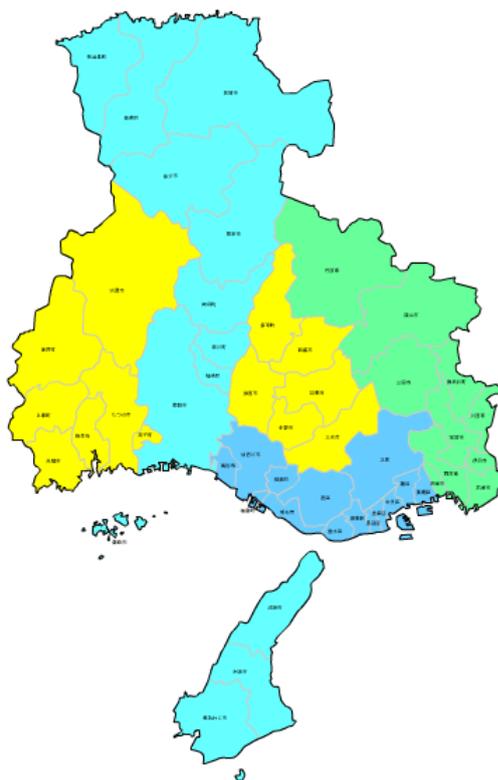
第 3-4-7 図 地域別 居住地域と日本の安全安心感ギャップ



第 3-4-8 図 地域別 生活満足度



第 3-4-9 図 地域別 地域問題に対する行政への信頼



### 3. 居住地域別

第 3-4-3 表では、居住地域別に重要な主観的データについて観察する。

居住地における安全安心感は、農村漁村が最も高い。逆に、工場の多い地域や商店・事業所の多い地域では低くなっており、都市部での安全安心感が相対的に低いことがうかがえる。反対に、日本における安全安心感は農村漁村が最も低くなっており、居住地域と日本全体におけるイメージのギャップが大きいことがうかがえる。幸福感は新興住宅地において最も高くなっており、工場地域では最も低くなっている。生活満足度は新興住宅地が高く、農村漁村は工場地域よりも低い。農村漁村では幸福感はある程度確保されているものの、生活満足度に対しては課題があることがうかがえる。一般的信頼感、災害時の行政への信頼は居住地域ごとに大きな差は見られない。地域問題に対する行政への信頼では、工場の多い地域が若干高く、商店・事業所の多い地域、新興住宅地では低くなっている。

第 3-4-3 表 居住地域別 主観的データ分布

	サンプル数	居住地				日本			
		平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
工場の多い地域	40	2.05	0.71	1	4	2.45	0.88	1	4
商店・事業所の多い地域	131	2.03	0.67	1	4	2.39	0.77	1	4
おもに古くからの住宅地	302	1.92	0.57	1	3	2.29	0.78	1	4
おもに新興住宅地	263	1.94	0.57	1	4	2.39	0.76	1	4
農村漁村	245	1.88	0.67	1	4	2.48	0.90	1	4
その他	19	2.00	0.67	1	3	2.37	0.83	1	4
		幸福感				生活満足度			
	サンプル数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
工場の多い地域	40	3.08	1.42	1	5	5.48	2.93	1	10
商店・事業所の多い地域	131	3.61	1.17	1	5	6.27	2.55	1	10
おもに古くからの住宅地	302	3.46	1.12	1	5	5.78	2.61	1	10
おもに新興住宅地	263	3.72	1.09	1	5	6.20	2.48	1	10
農村漁村	245	3.44	1.16	1	5	5.42	2.61	1	10
その他	19	3.58	0.77	3	5	5.74	2.49	1	10
		一般的信頼感				災害時			
	サンプル数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
工場の多い地域	40	1.58	0.50	1	2	2.68	0.76	1	4
商店・事業所の多い地域	131	1.61	0.49	1	2	2.57	0.72	1	4
おもに古くからの住宅地	302	1.54	0.50	1	2	2.57	0.70	1	4
おもに新興住宅地	263	1.61	0.49	1	2	2.55	0.66	1	4
農村漁村	245	1.60	0.49	1	2	2.53	0.70	1	4
その他	19	1.58	0.51	1	2	2.63	0.60	2	4
		地域問題							
	サンプル数	平均値	標準偏差	最小値	最大値				
工場の多い地域	40	2.75	0.71	2	4				
商店・事業所の多い地域	131	2.94	0.73	1	4				
おもに古くからの住宅地	302	2.80	0.71	1	4				
おもに新興住宅地	263	2.97	0.68	2	4				
農村漁村	245	2.87	0.76	1	4				
その他	19	3.11	0.74	2	4				

#### 4.行政区、地域、市町、居住地域別 日常生活における不安

第 3-4-4 表では、行政区、地域、居住地域別に日常生活における不安の第一位から第三位までの分布を集計し、最も回答の多かったものを挙げている。選択肢は、近隣の住環境、地域における人間関係、居住地の治安、地域の行政サービス、地域の防犯体制、地域の教育環境、自身の収入・所得、世帯の資産・負債、自分の健康、老後の自分の世話、家族の健康、家庭内での人間関係、生活上の孤立、日本全国の治安、警察の防犯体制、司法制度の公平性、メディアの報道姿勢、食の安全、大雨・台風・地震などによる自然災害、その他、特になし、である。なお、同数の回答が 3 つ以上ある場合は記載していない。市町別の分布は後ろの統計付録に掲載している。

行政区別で見た場合、日常生活における不安の第一位は全ての地域において「自身の収入・所得」であった。第二位、第三位は自身か家族の健康で占められている。地域別でも、第一位は自身の収入・所得であり、残りは自身か家族の健康がほとんどである。中播磨では食の安全が挙げられている。居住地域別で見ると、第一位は自身の収入・所得、第二位、第三位は自身か家族の健康で占められている。

基本統計量を見ると、自身の収入の分布や貯蓄の分布は下位から上位にかけて幅広く分布しており、経済的に問題のある層を中心にサンプリングしているとは言えない。負債に対する負担感も平均的には問題があると回答している層が中心とは言えない。男女比も半数程度である。にもかかわらず、兵庫県を複数の地域区分で見ても、不安の第一位は収入・所得であり、第二位、第三位は自身か家族の健康、という分布になっている。

調査年月が2008年12月であることを考えると、リーマンブラザーズの破綻以降、金融ショックにより経済問題に関心がシフトした可能性があるが、本調査はクロスセクションデータである為、ショック前後の変動を捉えることができないため、その影響をコントロールすることができない点は注意が必要である。

表 3-4-4 行政区、地域、居住地域別 日常生活における不安

		サンプル数	1位	2位	3位
行政区	阪神間	300	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康
	播磨	300	・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康
	丹波	300	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康
	淡路	100	・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康
地域	神戸	144	・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康
	阪神南	101	・収入、所得	・家族の健康	・収入・所得
	阪神北	55	・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康
	東播磨	138	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康
	北播磨	25	・収入、所得	・家族の健康	・自分の健康 ・家族の健康
	中播磨	97	・収入、所得	・食の安全	・食の安全
	西播磨	40	・資産、負債 ・家族の健康	・自分の健康	・自分の健康 ・老後の世話
	但馬	188	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康
	丹波	112	・収入、所得	・家族の健康	・自分の健康
	淡路	100	・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康
居住地域	工場の多い地域	40	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康
	商店・事業所の多い地域	131	・収入、所得	・自分の健康	・自分の健康
	おもに古くからの住宅地	302	・収入、所得	・自分の健康	・自分の健康
	おもに新興住宅地	263	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康
	農村漁村	245	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康

以上から得られた知見は以下の通りである。

- ① 淡路島、但馬は居住地の安全安心感が最も高い一方で、日本の安全安心感とのギャップが最も大きい地域でもある。また、農村漁村における居住地の安全安心感が高い一方で、日本に対する安全安心感は最も低いことから、兵庫県の日本海側、淡路島、また農村漁村では、居住地の安全安心感が高いが、日本に対する安全安心感とはギャップが大きい地域であることが確認される。
- ② 阪神間の都市部では地域間タイに対する行政への信頼感が相対的に低いが、災害時の行政への信頼に関しては地域別に大きな差は観察できない。
- ③ 日常生活における不安、心配事を序列化すると、第一が収入、所得であり、第二、第三が自身、および家族の健康に関する項目であることが確認される。これは行政区別、地域別、居住地域別で見ても同様の傾向を示した。

#### 第4節 「生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安」に関する調査分析と考察

##### 1. どうして「困難」を問題とするのか

人々の日常生活における「安全・安心」を論じるうえで、その対極にあると考えられる究極の危険状態である「死に至る状況」について考察することは、決して無駄なことではない。なぜなら「安全・安心」が追い求められる際に、確保すべき最低限の要件として暗黙裡に想定されるのは「死に至らない状況」だと判断されるからである。つまり、「安全・安心」を確立するうえで、「死に至る状況」の軽減と回避は消極的（減算的）な対策として必要不可欠なのである。

そうだとすれば、殺人・交通事故死などと同様に、個人を「死に至らしめる」自殺という事態は、社会の「安全・安心」を確保するうえで減ずることが望ましいと考えられる。

日本社会における年間自殺者は平成10年に32,863人を記録して以降、連続して年間3万人を超えている。平成19年の自殺者数は、33,093人である。同じ年の殺人事件認知件数が1,199件、平成20年の交通死亡事故者数が5,155人であることと比べると、自殺による「死者数」の圧倒的な多さが明らかになる。数字の点だけを見るならば、自殺という「危険」は、交通事故死・殺人といった危険と比較して、私たちの日常生活において格段に身近なもの＝より頻繁に発生する事象であると言える。この事態を鑑みれば、人々を「死に至らしめる」危険に満ちた凶悪犯罪や重大な交通事故に対して各種の対策が講じられるべきであるのと同様に、「自殺」に対してもなにかしらの政策・制度が策定される必要があることは、あらためて言うまでもないであろう。「安全・安心」な社会を日常生活の次元において実現するうえで、自殺へと人々を追い込む「死に至る状況」の内実を調査し、その社会的背景を分析し、そこ

で得られた知見に基づき具体的方策を講じていくことが必要である。

以上に述べた問題意識と対象設定に基づき、本報告書では、人々を「自殺」へと追い込む要因と考えられる「生きていくのが辛いと感じられる困難、悩み、不安」に関して実施した質問紙調査の結果を分析することを通して、年間3万人を超える自殺者を生み出す現在の日本社会の現実を前にして、どのような対象に関する／どのような人々を対象とした／どのような内容の支援が必要であるかについて考えていく。

## 2. 調査結果の分析

「生きていくのが辛いと感じられる困難、悩み、不安」に対して、それらを「軽減するためのどのような支援が有効に働いているのか」という深刻かつ大きな課題を今後検討していくための基礎的な分析を、アンケート調査の結果を用いながらおこなう。すなわち、支援が有効に働いていたかどうかは、把握することが容易でないので、直面した困難や悩みや不安に対してどのような支援が不足していたかという点に着目し、分析結果から政策的含意を得たい。

アンケート調査で、「あなたは、生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安に直面したことがありますか」と尋ねたところ、43.1%の人が「ある」と回答している。それだけ多くの人が「生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安（以下、「困難」）」に直面していることを踏まえると、その「困難」を事前に緩和することも必要であるし、前項の問題意識でも述べたように、「困難」を受けている程度の軽減や回避という消極的な対策を検討することも必要である。

具体的な対策を検討するためには、具体的にどのような「困難」に直面しているのか、なぜ「困難」に直面することになったのか、現在どのような支援を受けることができるのか、その結果「困難」は軽減されたのか、といったことを明らかとしていくことが必要である。ここでは、そのうち明らかにし得る次の2点について、分析していくことにする。最初に、どのような「困難」に直面し、それに直面した人はどのような人であるのか、ということ把握する。その上で、「困難」に対して誰かに相談ができているか、また、どのような支援や仕組みがあれば、その「困難」を軽減することができたらと人々は感じているのか、について分析する。

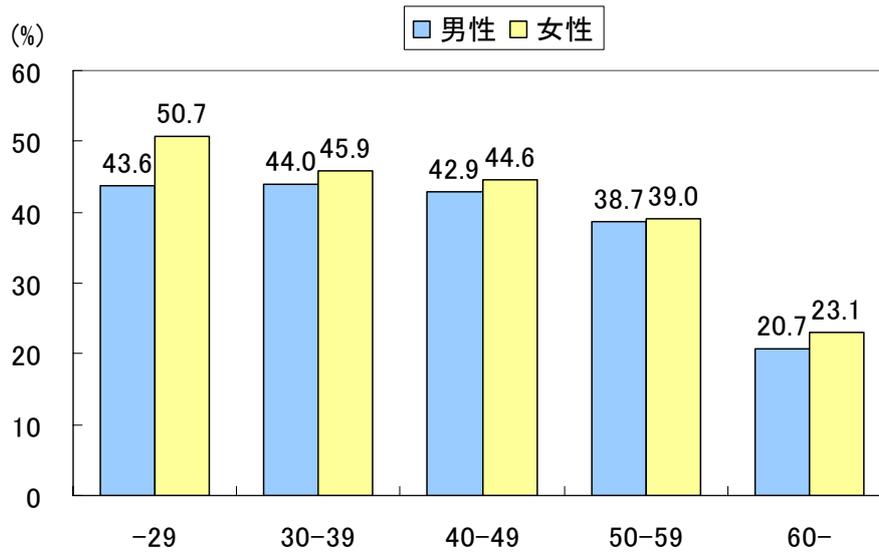
### (1) どのような人が、どのような「困難」に直面しているのか

「困難」に直面した人は、全体の4割であるが、年齢別に見ると、若年ほど「困難」に直面したことがあると回答している。年齢に加えて性別をあわせて見ると、第3-5-1図のように若年女性の比率が高くなっている。絶対的な基準で考えれば、60歳代以外の各年代において4割の人が「困難」に直面したことがあるという結果になっている。

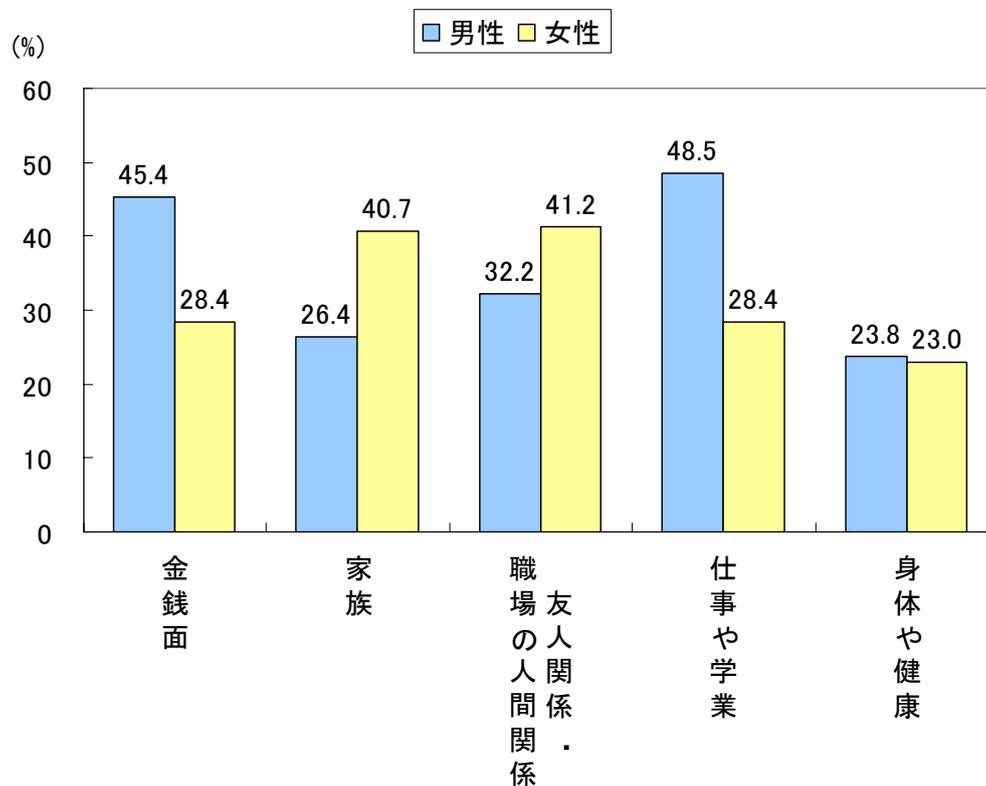
「困難」の内容を見ると、最も多くの人が直面したことのある「困難」は「仕事や学業」であり、およそ4割である。それに続くのは、「金銭面」、「友人関係」、「職場の人間関係」、

「家族」であり、いずれも3割を越えている。「身体や健康」については、2割超の人が「困難」を経験したと回答している。それを第3-5-2図のように男女別に見ると、直面しやすい「困難」が異なるであろうことが予想される。男性は金銭面や仕事、女性は家族や人間関係において特に比率が高くなっている。さらに、年齢をあわせて見たものが第3-5-3図であり、性別と年齢によって直面しやすい「困難」が異なる様子がうかがえる。

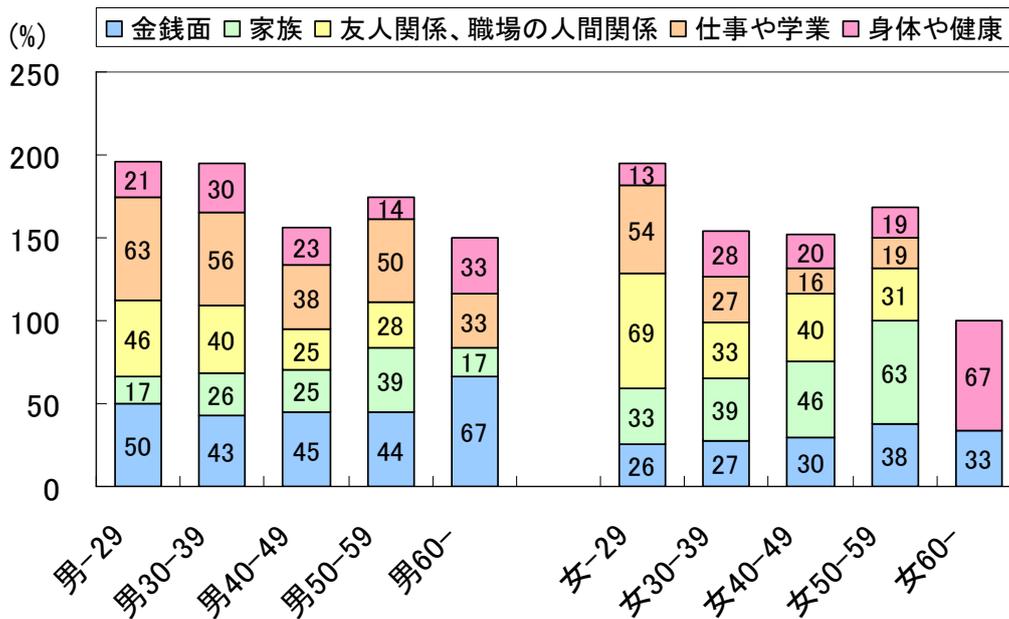
第3-5-1図 年齢および性別と「困難」に直面した経験の有無



第3-5-2図 性別と具体的な「困難」(N=431; 複数回答)



第3-5-3図 性別・年齢と具体的な「困難」(N=431; 複数回答)



(2) 「困難」に関して誰かに相談することができるか

「困難」に直面したときに、誰かに支援を求めことができる、あるいは支援を求める環境や仕組みがあるということは、「困難」の軽減策となる。

最初に見ておきたいのは、「困難」に直面したときに誰かに相談したかどうかである。「困難」について誰かに「相談した」という人は、「困難」に直面した人のうちの 62%であり、残りの 38%の人は「相談しなかった」と答えている。具体的な「困難」ごとおよび性別に、相談した人の割合を見たものが第 3-5-4 図である。どの「困難」について見ても、女性のおよそ 7 割以上が「相談した」という一方で、男性は 5 割程度となっている。最も相談しなかった問題となっているのは、男性においては「家族」、女性においては「友人関係、職場の人間関係」であり、問題の内容によっては相談しにくい、あるいは相談する相手がいないということが考えられる。

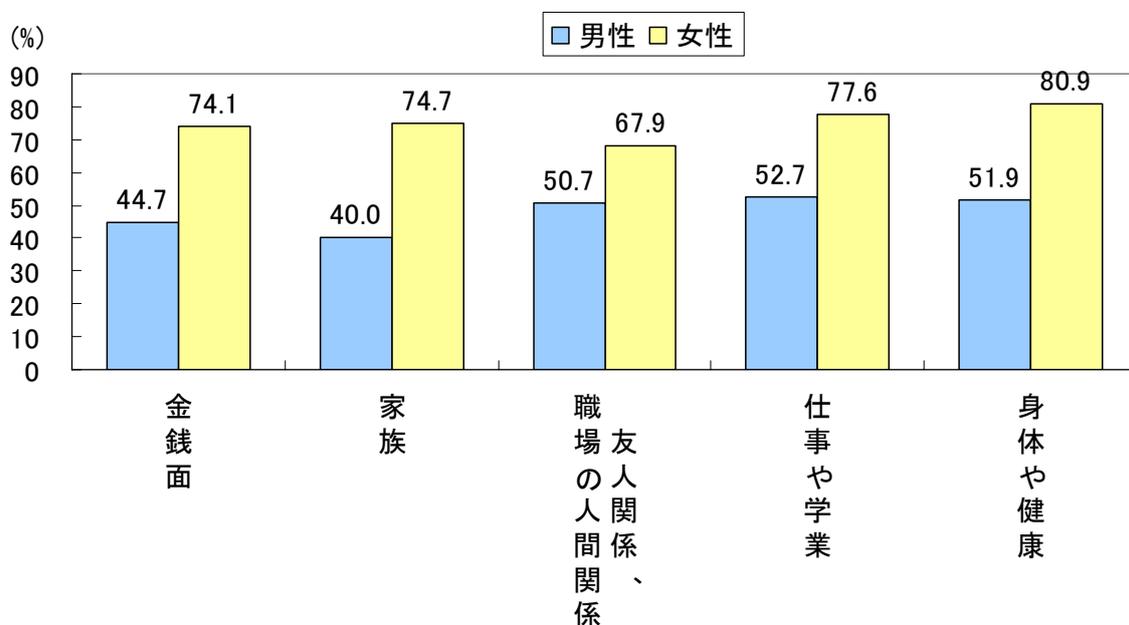
相談した人はどのような人に相談したのか、また、相談しなかった人はなぜ相談しなかったのだろうか。相談した人が最も多く相談したのが「昔からの友だち」であり、「母」、「カウンセラー・心の相談室」、「父」、「兄弟姉妹」と続いている。友だちや家族という各自がもつ社会的ネットワークを頼ることに加えて、カウンセラー等の私的な支援を 2 割強の人が受けていることは特筆すべきことであろう。(第 3-5-5 図)

一方、相談しなかった人の理由は、「たとえ相談しても解決しないと考えたので」という人がおよそ 4 割で最も多く、「そもそも相談する相手がいなかったのに」、「人に言えるようなことではないと思ったので」、「相談することで相手に迷惑をかけたくなかった」という理由はそれぞれ 15%程度となっている。(第 3-5-6 図)

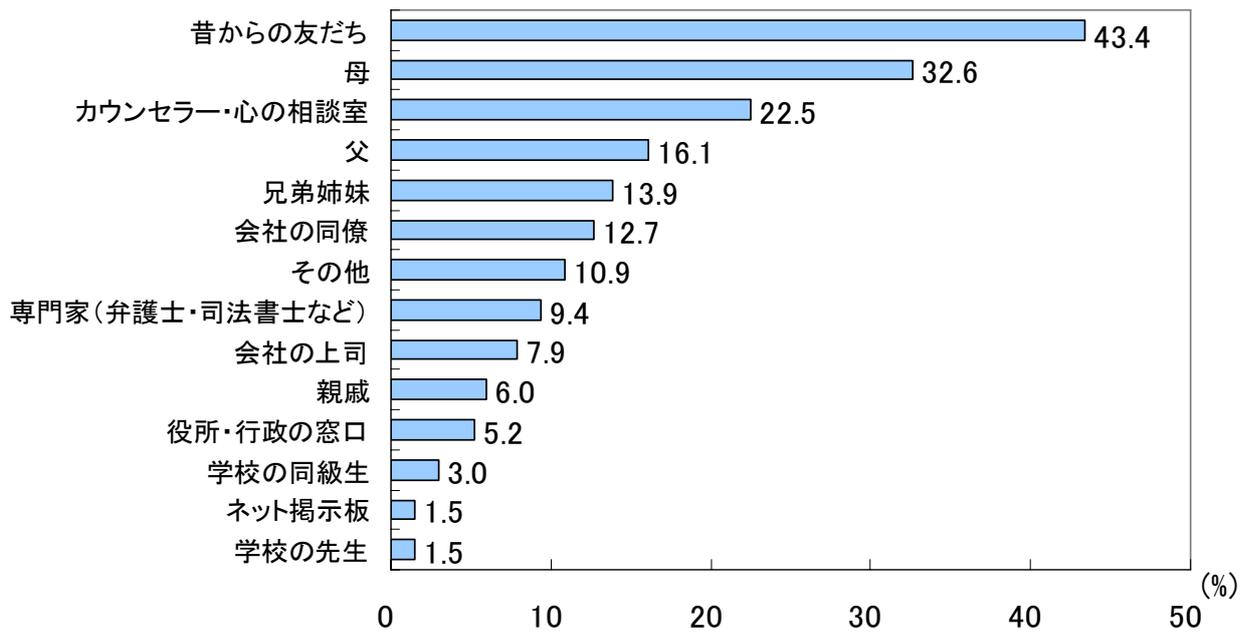
調査では、実際のこととは別に、「望ましいと思う解決方法」を尋ねている。第 3-5-7 図では、「人には相談せずに、自分ひとりで」、「友人などに相談」、「地縁組織や NPO などの支援

を受けて」、「行政の制度・政策の支援を受けて」、「医者、弁護士、カウンセラーなどの専門家の支援を受けて」といった回答項目がある。ここで、誰にも相談しないで自分自身で解決していくことが望ましいというグループと、誰かに相談したり、支援を受けたり、他人との関係を得ながら解決していくのが望ましいと思うグループの2つに分け、「困難」に直面したという現実社会ではどのような行動を取ったかを集計する。その結果を見ると、自分自身で解決するのが望ましいと思っている人のうち、およそ6割が実際に相談しなかったと回答し、4割の人が相談したと回答している。一方、誰かに相談したり、支援を受けたりしながら解決するのが望ましいと思っている人のうち、およそ3割の人が相談しなかったとしている。データ把握上の制約もあるが、「困難」に対処するための環境や支援を受けることのできる仕組みが不十分である可能性が浮かび上がっているとも言える。

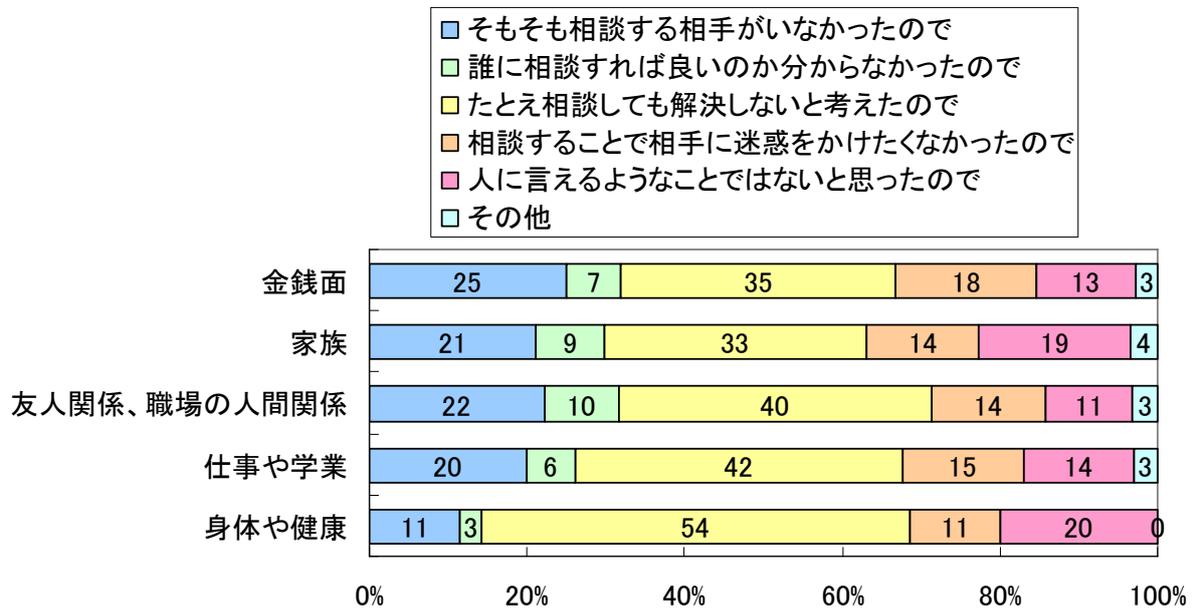
第3-5-4図 具体的な「困難」について「相談した」人の割合



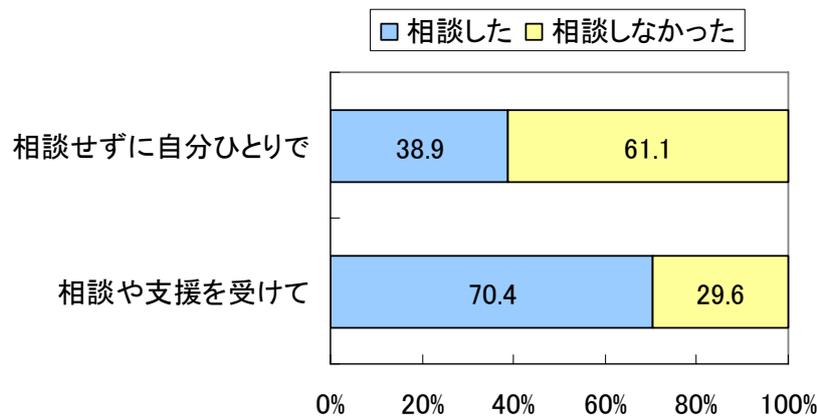
第3-5-5図 相談した相手 (N=267 ; 複数回答)



第 3-5-6 図 「困難」別の相談しなかった理由



第 3-5-7 図 望ましいと思う解決方法と実際の相談状況



### (3)求められる支援とは

「困難」に直面した人が「どのような支援があればその「困難」が軽減された」と感じているかを捉えながら、どのような支援や仕組みが「困難」の軽減策として求められているかという政策的含意を探っていく。特に、「困難」の種類に応じて、求められる支援が異なることが予想されるが、いったいどのような支援が求められているのか。それらが的確に社会に埋め込まれていないがゆえに、「困難」が軽減されないままになっているのではないか。「困難」と求められる支援の関係性を明らかにしておきたい。

第 3-5-8 図は、「困難」の種類別にどのような支援があれば「困難」が軽減したと感ずるかについて、その比率を見たものである。「困難」が複数回答であり、求める支援と 1 対 1 の関係が見えにくい。そこで、直面した「困難」が 1 つだけであった回答者を対象として、求める支援との関係を見ることにする。金銭面においては、「経済的支援」や「専門的支援」が求められており、直感的に理解し得る結果となっている。注目すべき点は、家族、友人関係や職場の人間関係、仕事や学業といった問題において「精神的支援」を求める回答が 6 割から 9 割となっていることである。多くの人がそのような「困難」において精神的な支援を得にくい状況に置かれていることが示唆される。

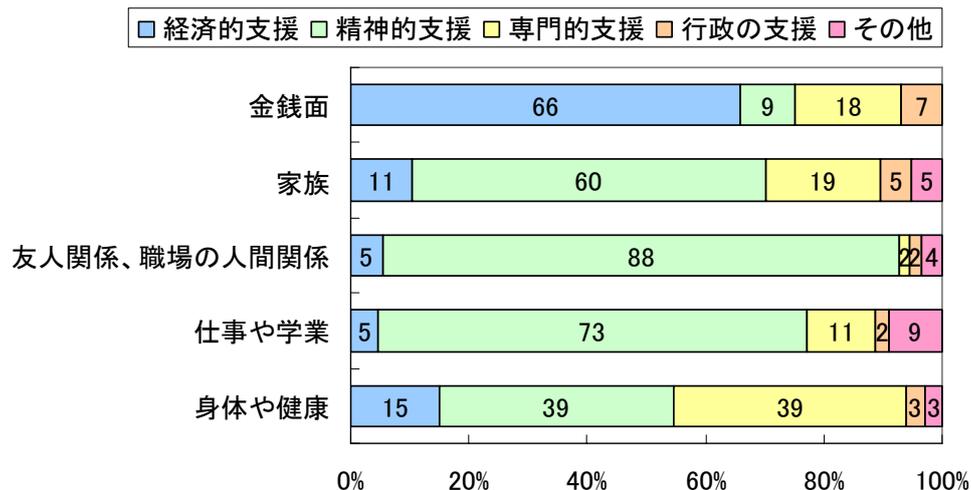
第 3-5-9 図は、性別と年齢を軸に求める支援を見ている。それぞれの性別や年齢層が直面しやすい「困難」があることが第 3-5-3 図で見られたが、それに応じた支援が求められている様子がうかがえる。たとえば、男性の 30 歳未満では、金銭面の「困難」が 50%と大きいですが、精神的な支援が求められる家族、人間関係、仕事に関する「困難」の割合を足し合わせると 126%となる。つまり、経済的支援が 29%、精神的支援が 46%という結果が導かれていると言える。言い換えれば、直面しやすい「困難」への対策を性別や年齢層を絞りながら検討すると同時に、軽減方策もそれに応じて検討していく必要がある。

計量モデルを用いて、「困難」と支援の関係性をより明確にする。求める支援、すなわち、経済的支援・精神的支援・専門的支援・行政の支援（その他は除く）を被説明変数とし、直面した「困難」、性別、そして年齢を説明変数とする。推定方法には、順序のない複数の項目をうまく取り扱える多項ロジット・モデルを採用する。推定結果は、第 3-5-1 表のとおりであ

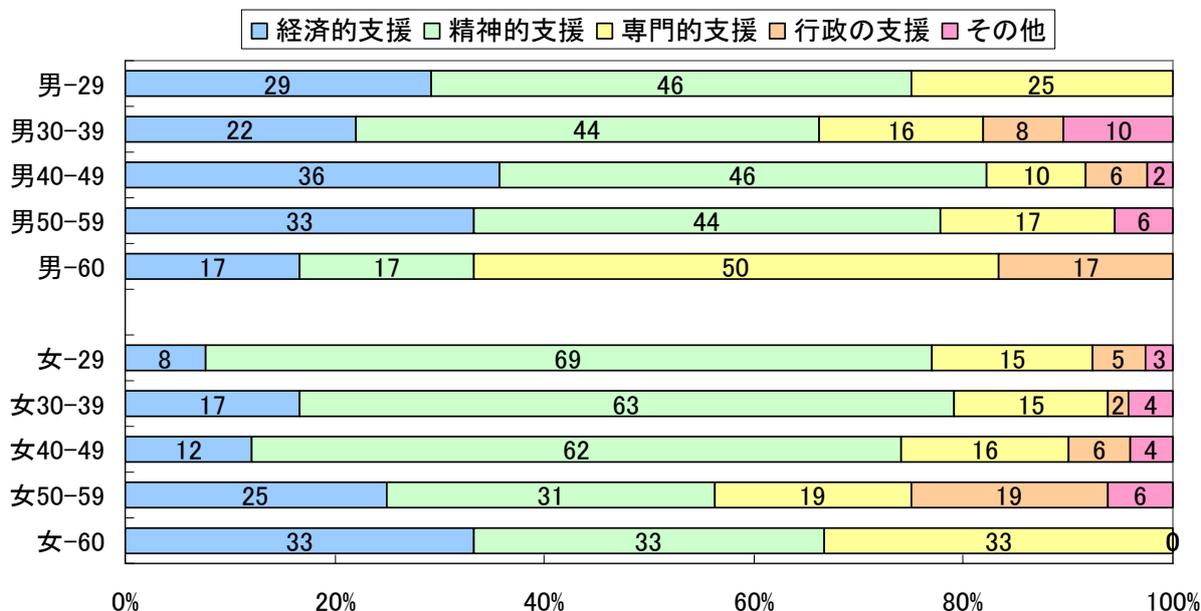
り、5%水準で有意な結果が得られたもののみを掲載している。

クロス集計から見られる傾向と同様の結果が得られている。金銭面の「困難」については、経済的支援、行政の支援、専門的支援を求める傾向がある。家族や友人関係あるいは職場の人間関係の「困難」に関しては、やはり経済的支援や専門的支援よりも精神的支援を求めている。そして、身体や健康については、専門的支援を求めている。

第3-5-8図 「困難」ごとの「困難」が軽減され得たと感じる支援の内容 (N=248)



第3-5-9図 性別・年齢と求める支援



第3-5-1表 推定結果 (多項ロジット・モデル)

選択肢1(左)の選択肢2(右)に対するオッズ比	係数
<b>金銭面の困難</b>	
経済的支援—専門的支援	2.21 ***
経済的支援—行政の支援	1.11 *
経済的支援—精神的支援	3.12 ***
専門的支援—精神的支援	0.91 **
行政の支援—専門的支援	1.10 *
行政の支援—精神的支援	2.01 ***
<b>家族面の困難</b>	
精神的支援—経済的支援	0.67 *
<b>友人関係、職場の人間関係の困難</b>	
精神的支援—専門的支援	1.09 **
<b>身体や健康の困難</b>	
専門的支援—精神的支援	1.12 ***
<b>性別:男性ダミー</b>	
経済的支援—精神的支援	0.66 *
サンプル・サイズ	411
対数尤度	-371.18
$\chi^2$	180.75 ***
擬似決定係数	0.196

\*\*\*, \*\*, \*は、それぞれ0.1%, 1%, 5%水準で有意であることを示す。

### 3. 「困難」への具体的支援に関する政策提言

#### (1) 「精神的支援」の重要性

これまでの分析で見てきたように、「生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み、不安」に直面した回答したもののうち、「どのような支援があれば困難、悩み、不安は軽減されたと考えるか」との問いに対する回答において、男女 60 歳以上を除くどの世代においても「お金などの経済的支援」より「理解・共感といった精神的な支援」と答えるものが多かった（第 3-5-9 図参照）。この結果から、「自殺」へと人々を追い込むと考えられるような「困難、悩み、不安」への対策において、的確な精神的なサポート講じることが重要である点が指摘できる。

もちろん、各人が抱えている「困難」の種類（金銭面／家族／友人関係、職場の人間関係／仕事や学業／身体や健康）によって、必要だと考えられている支援の内容は異なってくる。当然ながら、図 8 で示したように「金銭面での困難」に直面した回答者にとって、それを「軽減できる支援」とは経済的な支援にほかならない。また、「身体や健康」に関しては、「専門的支援」があげられている。このことは、病気や怪我に対しては、医者など医療の専門家の

支援が求められることの表れだと判断される。だが、それ以外の困難については総じて「精神的支援」が有効だと考えられている点は注目に価する（第 3-5-9 図参照）。「仕事や学業」に関わる悩みに関しても「精神的な支援」が有効だと答えられていることから、単なる経済的・物質的な支援だけでは、人々を「死に至る状況」へと追いやる危険性を伴う「困難」への有効な対処策として十分でないことが明らかになる。

「精神的支援」は、とりわけ若者層に対して有効だと判断される。その理由は、第 3-5-3 図で示したように年齢が低いほど「友人関係、職場の人間関係」や「仕事や学業」に関する困難をより多く経験する傾向が見て取れるからである。

## (2) 「家族」に関する「困難」への支援の必要性

調査結果から明らかになったように、一般的な傾向として、男性は「金銭面」や「仕事や学業」に関する困難に直面し、女性は「家族」に関する困難に直面する（第 3-5-2 図参照）。ここで考えるべきことは、「家族」をめぐる困難がほかの種類の困難と比較してより複雑な様相を示しており、それ故にそれへの対応に際して外部からの支援を講じることが今後必要になるであろう、という点である。

「家族」をめぐる「困難」の特徴は、その解決策を考えてみた際の自己撞着性ととも呼ぶべき側面に見て取れる。前述の通り、「困難」に直面と回答した人のうちおよそ 6 割の人が「誰かに相談した」と答えている。第 3-5-5 図に示したように、その相談相手の内訳をみると（複数回答）、多い順に「昔からの友だち（43.4%）」、「母（32.6%）」、「カウンセラー・心の相談室（22.5%）」、「父（16.1%）」、「兄弟姉妹（13.9%）」となっており、友だちと並んで「家族メンバー」が主たる相談相手である様子がうかがえる。このことは裏を返せば、「困難」の要因／原因自体が「家族」にある場合には、家族メンバーに相談することが難しいと同時に、たとえ相談したとしてもそのこと自体が自己撞着的に「家族」をめぐる「困難」をさらに深めていく危険性を孕んでいることが予想される。さらに「相談しなかった」人のなかで、その理由を「人に言えるようなことではないと思ったので」と答えた人の自由記述回答において、「単に家族や自分の問題なので公にしたくなかった」や「家庭内の人間関係は、他人に話したとしても、親身になって聞いてくれないと思った」との意見が表明されていることを踏まえると、「家族」に関する「困難」は家族内のメンバーに相談するのが比較的難しく、さらに家族以外の他人に相談することは憚られるという二重の難しさを伴っているように見受けられる。

こうした「家族」に関する「困難」の特徴を踏まえるならば、ほかの「困難」と並んで「家族」をめぐる深刻な状況に対する「精神的な支援」のあり方を具体的政策のもとで考えていくことが必要だと判断される。

## (3) 世代／内容に対応した支援ならびに公的／共的／私的支援の独立と協同の必要性

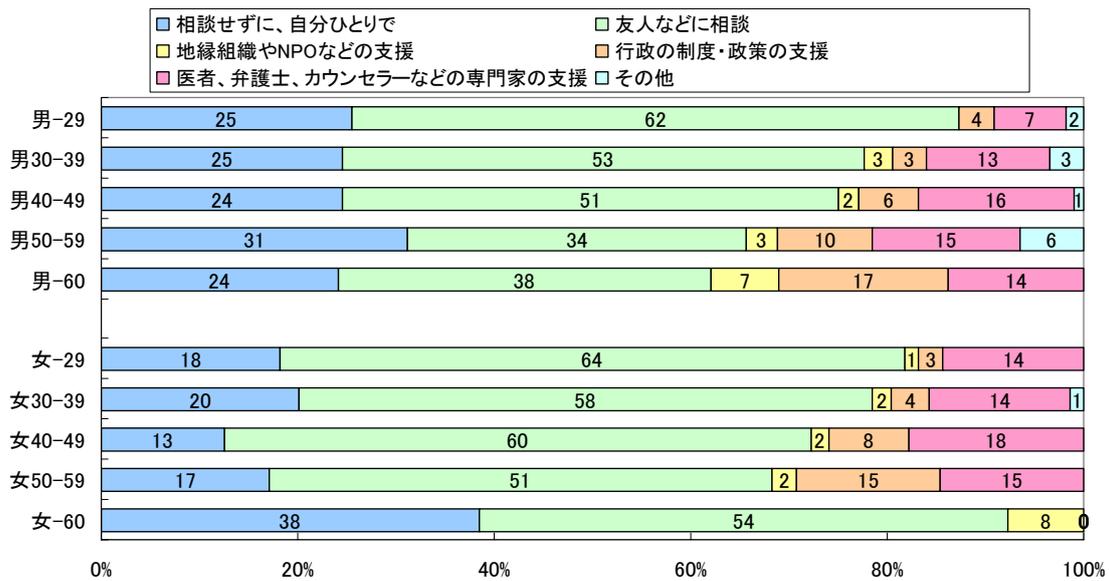
あらためて言うまでもないことだが、「生きていくのが辛いと感じる困難」の経験のされ方

とその内実は、それに直面する各個人ごとに多様である。しかしながら、調査データの分析を通じて見てきたように、そこになにかしらの傾向性を読み取ることは十分に可能である。そこで得られた知見を踏まえて、有効な支援を「困難」の違いごとに／世代の違いごとに／男女の違いごとに講じていくことが、今後の具体的な政策立案の過程において重要な課題になると考える。

その際に重要なことは、「友人など」からの支援に加えて、「行政の制度・政策」など公的な支援、「地縁組織や NPO など」による共的支援、「医師、弁護士、カウンセラーなどの専門家」を利用した私的支援、これら三者の相互の独立を前提としたうえでの協同のもとで、より包括的な支援体制を作り上げていくことであろう。

今回の調査では、男性で 25.7%、女性で 18.1%の回答者が「人には相談せずに、自分ひとりで」困難を解決することが望ましいと思うと答えた。さらに、「友人などに相談」が男性で 49.1 パーセント、女性で 58.9 パーセントと半数近くを占めるのに対して、公的／共的支援を望ましいとする意見は、前者が男性 6.2%／女性 5.5%、後者が男性 2.6%／女性 2.0%と、私的支援を望ましいとする意見（男性 13.7%／女性 14.8%）と比較しても低い数値を示していた。（第 3-5-10 図）

個々人が直面する困難への対応に際して「友人」のネットワークから得られる支援を活用することは、今後とも必要なことであろう。だがしかし、リスク社会と形容される現代社会を生きていくうえで多くの人々が、従来は予想もしなかった「困難」に直面する機会と可能性に見舞われている。そうした状況下において、「友人などに相談」するだけでは「困難」を容易に解決できないであろうことは、想像に難くない。だとすれば、経済的な格差によって利用の可否が規定されがちな私的援助とは独立したかたちで、今回の調査結果から明らかにされた「精神的支援の重要性」を十分に踏まえたうえで、今後どのようにして共的支援や公的支援を充実させていくべきかを具体的に検討することが、「生きていくのが辛いと感じる困難、悩み、不安」に直面した人々を主たる対象とした制度・政策の立案における重要な課題である。



## 第4章 結語と政策提言

### 第1節 本研究からの暫定的結論

本報告では多様な分析を示したが、ここで本研究から得られた主要な知見をまとめてみると、以下のようである。

#### 1. 信頼感と幸福感

- ① 全県下にわたる回答からは、行政への信頼、自治会・町内会への信頼、近隣者への信頼が高いほど、回答者は幸福であり、生活に満足であり、安全安心感が高いことが判明した。
- ② 中でも、近隣者への信頼が高いグループの幸福感、生活満足度の平均値は極めて高い。

これらの結果は因果関係を示すものではないが、安全安心感や幸福感の高さと行政等への信頼感の高さとの間に正の相関があることは注目してよい。

#### 2. 人生の困難と幸福度

- ③ 生きていくのが辛いと感じられるほどの困難を経験したグループは、幸福度、生活満足度、安全安心度のすべてが、困難を経験していないグループよりも低い。
- ④ 望ましい支援として経済的支援を求めるグループの幸福感、生活満足度は低い。
- ⑤ 精神的な支援や行政の支援を求めるグループの幸福感、生活満足度は高い。
- ⑥ 役所や行政の支援を望むグループは、安全安心度がやや低いグループである。
- ⑦ 健康であると感じている人は、幸福度、安全安心感ともに非常に高い。

- ⑧ 健康状態が思わしくない人は、幸福感が低く、国への安全安心感、地域の安全安心感ともに低い。

### 3. 安全安心感と信頼感の因果関係

- ⑨ 共分散分析によって、一般的信頼、制度への信頼、災害時の行政への信頼などの信頼性から安全安心感と生活満足度への因果関係が明確に認められた。
- ⑩ 行政など社会制度に対する信頼感が安心した生活の基礎となっていることが明らかとなった。
- ⑪ 人々の安心感は、地域への信頼感を基礎とし、地域への信頼感は行政や制度への信頼感を基礎としていることが明らかとなった。

この結論は、昨年度異なるサンプルに基づいて得られた結論を支持している。人は信頼できるとする一般的信頼、制度への信頼、災害時の行政への信頼が相互に正の影響を及ぼしつつ人々の信頼感が高まっていき、そのことが人々の安全安心感や生活満足度にプラスの影響を及ぼしていることが確認できた。

またこうした結論は、年齢や所得水準などの客観的変数の影響を取り除いた順序プロビットモデルによる分析でも確認できた。

- ⑫ 兵庫県全体で見れば、居住地の安全安心感、日本の安全安心感に対して、災害時の行政への信頼、一般的信頼が、世帯収入や住宅ローンの負担感などの影響を考慮した上でも、正の影響を与えていることが確認できた。
- ⑬ 阪神間、丹波とも、一般的信頼は居住地の安全安心感に正の影響を与えているが、災害時の行政の対応では、丹波地方で、頼りにできるという回答が有意に居住地の安全安心感を引き上げている。

### 4. 安全安心感の地域性

- ⑭ 但馬を含む兵庫県の日本海側、淡路島、また農村漁村では、居住地の安全安心感が高いが、日本全体の安全安心度は低いと感じており、両者の認識ギャップが大きい。
- ⑮ 阪神間の都市部では地域問題に対する行政への信頼感が相対的に低いが、災害時の行政への信頼に関しては地域別に大きな差は見られない。
- ⑯ 日常生活における不安、心配事を序列化すると、第一が収入・所得であり、第二、第三が自分自身および家族の健康であることが確認される。この結果は、行政区別、地域別、居住地地域別データによっても確認された。

### 5. 「困難」への対応

- ⑰ 金銭面での困難に直面した回答者は経済的支援を望み、身体や健康面での困難に対して専門

家の支援を望んでいるが、それ以外の困難に対しては総じて精神的支援が望まれている。この傾向は若年層においてより著しい。

- ⑱ 家族に関する困難は、相談する相手がいないことと、他人に相談することがはばかれるとの回答が多く、とりわけ精神的支援が重要な問題だと思われる。
- ⑲ 困難に直面した人に対しては、友人・家族などの私的支援、地域・職場などの共同的支援、および行政・専門家などの公的支援を有機的に結合した支援が必要である。

## 第2節 政策提言

以上の分析から兵庫県の安全安心度を向上させるための政策提言を求めれば、次のように要約することができる。

提言1：人々の社会に対する信頼度は、普段の行政に対する信頼度、災害時の行政に対する信頼度、地域に対する信頼度などとの相互作用の中で形成され、人々の安全安心感、幸福感の基盤となっているため、行政への信頼を高めるような政策手段の選択、政策実行態度が何より肝要である。

提言2：地域に対する安全安心度と日本全体の安全安心度に対する認識ギャップ、行政への信頼度、災害時の行政に対する信頼度などに関しては都市部と農村漁村部との地域差が大きいため、安全安心政策の実行にあたっては、地域差に配慮したきめ細かい対策が必要とされる。

提言3：生きることが辛いと感じられるほどの困難を経験した人の安全安心度や幸福感は低いため、そのような困難に陥らないような予防策と、困難に陥った人への精神的支援を充実させることが安全安心政策としても重要である。

提言4：人々の不安要因の第一位は収入・所得であるが、収入・所得の向上が安全安心感の向上につながるとは限らない。安全安心政策としては、提言1に述べたことが重要である。

提言5：地域別特性に配慮した効果的な安全安心政策を立案、実行するには、本研究で実施したようなインターネット調査を定期的の実施し、有効に活用することが重要である。

## 第3節 結び

本研究はインターネット調査により兵庫県下から回収された 1,000 件の回答を分析することにより進められた。質問票の質問は 62 項目あり、そのすべてに回答が寄せられたため、得られた回答数は 62,000 個にのぼる。これだけのデータは多様な分析を可能にするが、ここに報告できたのはそのごく一部の分析結果に過ぎない。

たとえば、回答者の所在地は郵便番号単位で報告されている。したがってこのデータを用いれば、特定の町村や、一定の地理的特性を備えた行政区以外の地域に対して、安全安心政策立案上の必要事項に関する情報を得ることができる。ここで報告したいいくつかの分析結果が示しているように、主観的判断を含めた安全安心への回答者の感じ方には地域差が大きいため、そのような情報は地域的特性を考慮した政策立案のためには不可欠の基礎データを提供することになるであろう。

1995 年の阪神・淡路大震災で安全安心の確保の重要性を深く認識した兵庫県にとって、本研究のデータ収集方法、科学的分析手法、および収集されたデータが有用であることを願っている。

基本統計量 属性データ

項目	サンプル数	項目	サンプル数		
性別 男性	548	中卒	23		
別 女性	452	高卒(全日制、定時制含む)	317		
結婚 有配偶者	673	短大卒・専修学校・高専卒	227		
無配偶者	327	大卒(全日制、定時制含む)	367		
家族構成	親と同居	116	学 大学院卒(修士、博士)	43	
	子と同居	332	歴 現役高校生	1	
	祖父母と同居	35	現役短大・専修学校・高専	6	
	兄弟姉妹と同居	85	現役大学生	10	
	孫と同居	4	現役大学院生(修士、博士)	5	
年齢階層	配偶者と同居	647	旧制大学	1	
	一人暮らし	103	専門的・技術的職業従事者	219	
	10代	7	管理的職業従事者	57	
	20代	125	事務従事者	197	
	30代	384	販売従事者	79	
	40代	308	職業	農林・漁業作業者	4
	50代	134		採鉱・採石作業者	1
60代	38	運輸・通信従事者		23	
70代	4	技能工・生産工程作業者		56	
		保安職業従事者		7	
居住年数	3年以内	251	サービス職業従事者	87	
	4～10年	289	無職	234	
	11～22年	220	勤続年数	2年以内	188
	22～68年	251		3～8年以内	202
		9～16年以内		192	
住居形態	転入 有	687	17～50年	184	
	無	313	正規雇用	466	
	持ち家(一戸建)	602	役員・経営者	32	
	持ち家(集合住宅)	124	自営業者	77	
	民間の賃貸住宅(一戸建)	25	雇用形態	家族従業者	13
	民間の賃貸住宅(集合住宅)	151		パート	69
	公営の賃貸住宅(一戸建)	2		アルバイト	38
	公営の賃貸住宅(集合住宅)	45		派遣労働者(常用雇用型)	23
勤め先の社宅・寮(一戸建)	10	派遣労働者(登録型)		12	
勤め先の社宅・寮(集合住宅)	36	契約社員	27		
		嘱託社員	6		

項目		サンプル数	項目	サンプル数
役職	役職無し	506	10万円未満	547
	監督・職長・班長・組長	47	10-50万円未満	56
	係長	78	50-150万円未満	50
	課長	58	150-250万円未満	33
	部長	35	250-350万円未満	26
従業員規模	1-4人	130	350-450万円未満	12
	5-9人	61	450-550万円未満	4
	10-29人	88	550-650万円未満	8
	30-49人	40	650-750万円未満	7
	50-99人	52	750-850万円未満	5
	100-299人	88	850-1000万円未満	6
	300-499人	53	1000-1200万円未満	2
	500-999人	51	1200万円以上	2
	1000人以上	153	10万円未満	91
	官公庁	50	10-50万円未満	64
本人収入	10万円未満	167	50-150万円未満	93
	10-50万円未満	42	150-250万円未満	68
	50-150万円未満	100	250-350万円未満	61
	150-250万円未満	95	350-450万円未満	40
	250-350万円未満	103	450-550万円未満	50
	350-450万円未満	108	550-650万円未満	29
	450-550万円未満	89	650-750万円未満	18
	550-650万円未満	64	750-850万円未満	12
	650-750万円未満	56	850-1000万円未満	30
	750-850万円未満	36	1000-1200万円未満	26
	850-1000万円未満	42	1200万円以上	120
	1000-1200万円未満	19	10万円未満	507
	1200万円以上	10	10-50万円未満	30
	10万円未満	14	50-150万円未満	149
	10-50万円未満	4	150-250万円未満	76
	50-150万円未満	10	250-350万円未満	19
	150-250万円未満	40	350-450万円未満	4
250-350万円未満	84	450-550万円未満	1	
350-450万円未満	104	550-650万円未満	3	
450-550万円未満	126	650-750万円未満	1	
550-650万円未満	101	750-850万円未満	2	
650-750万円未満	91	850-1000万円未満	2	
750-850万円未満	79	1000-1200万円未満	6	
850-1000万円未満	100	1200万円以上	8	
1000-1200万円未満	53			
1200万円以上	48			
世帯年収			世帯不労所得	
			貯蓄額	
			住宅ローン返済額	

項目	サンプル数	
10万円未満	517	
10-50万円未満	5	
住宅 ローン 借入 残高	50-150万円未満	9
	150-250万円未満	7
	250-350万円未満	7
	350-450万円未満	5
	450-550万円未満	8
	550-650万円未満	8
	650-750万円未満	8
	750-850万円未満	13
	850-1000万円未満	21
	1000-1200万円未満	24
	1200万円以上	179
	住宅 ローン 以外 の 負債 返済 済額	10万円未満
10-50万円未満		71
50-150万円未満		53
150-250万円未満		14
250-350万円未満		5
350-450万円未満		4
450-550万円未満		3
550-650万円未満		0
650-750万円未満		0
750-850万円未満		2
850-1000万円未満		0
1000-1200万円未満		3
住宅 ローン 以外 の 負債 残高	1200万円以上	6
	10万円未満	625
	10-50万円未満	41
	50-150万円未満	49
	150-250万円未満	26
	250-350万円未満	15
	350-450万円未満	4
	450-550万円未満	7
	550-650万円未満	3
	650-750万円未満	1
	750-850万円未満	1
	850-1000万円未満	2
1000-1200万円未満	3	
1200万円以上	11	

	項目	サンプル数
日常行動	階段の上り下りができない	9
	公共機関での外出ができない	12
	日用品の買い物ができない	9
	食事の用意ができない	38
	銀行での預貯金ができない	12
通院日数	まったく行かない	328
	5日未満	348
	5～10日	173
	11～30日	111
	30日より多い	40
犯罪被害経験	空き巣	110
	放火	8
	強盗や傷害	24
	ひったくり	35
	自動車、オートバイ盗難	190
災害経験	痴漢やつきまとい	147
	暴行傷害	31
	大雨	172
	台風	236
	地震	391
望む解決法	生きていくのが辛いと感じるほどの困難、悩み不安の経験	431
	人には相談せず、自分ひとりで解決	223
	友人などに相談し、解決していく	535
	地縁組織やNPOなどの支援を受ける	23
	行政の制度・政策の支援を受ける	59
困難の内容	医者、弁護士、カウンセラーなどの専門家の支援を受ける	142
	金銭面	161
	家族	143
	友人関係、職場の人間関係	157
	仕事や学業	168
必要な支援	身体や健康	101
	お金などの経済的支援	97
	理解や共感といった精神的支援	225
	専門的な知識に基づく支援	67
	役所や行政による支援	22



幸福感の平均値（社会属性別）

属性	2007	2008	全サンプル
性別			
男性	3.43	3.47	3.45
女性	3.73	3.60	3.67
結婚			
既婚	3.81	3.76	3.78
未婚ほか	3.11	3.06	3.08
年代			
10代	3.56	2.43	3.06
20代	3.54	3.34	3.46
30代	3.59	3.56	3.58
40代	3.68	3.59	3.63
50代	3.40	3.55	3.48
60代	3.54	3.42	3.92
70代	3.75	4.25	3.56
転入経験			
経験あり	3.60	3.62	3.61
経験なし	3.53	3.33	3.42
最終学歴			
中卒	3.70	2.83	3.23
高卒	3.44	3.42	3.43
短大・専修学校卒	3.70	3.50	3.60
大学卒	3.56	3.67	3.61
大学院卒	3.83	3.79	3.81
その他	3.74	3.26	3.50
雇用形態別			
正規職員・従業員	3.56	3.62	3.59
役員・経営者	4.04	3.59	3.79
自営業者	3.56	3.30	3.43
家族従業者	3.56	3.77	3.68
パート	3.51	3.70	3.61
アルバイト	3.22	3.08	3.15
派遣労働者（常用雇用型）	3.06	3.09	3.08
派遣労働者（登録型）	3.62	3.08	3.42
契約社員	3.42	3.07	3.22
嘱託社員	3.00	2.83	2.87

その他	2.80	4.00	3.25
現住所居住年数			
2年以下	3.57	3.43	3.50
3年から5年以下	3.30	3.37	3.33
6年から10年以下	3.57	3.59	3.58
11年から20年以下	3.57	3.62	3.60
21年以上	3.67	3.59	3.63
1人暮らし			
はい	3.04	3.27	3.15
いいえ	3.65	3.56	3.61
世帯年収別			
50万円未満	3.15	3.78	3.52
50万円-150万円	2.38	3.30	2.89
150万円-250万円	3.40	3.23	3.30
250万円-350万円	3.35	3.04	3.18
350万円-450万円	3.31	3.41	3.36
450万円-550万円	3.56	3.59	3.58
550万円-650万円	3.54	3.67	3.61
650万円-750万円	3.75	3.64	3.70
750万円-850万円	3.51	3.72	3.61
850万円-1000万円	3.91	3.86	3.88
1000万円-1200万円	4.06	3.77	3.91
1200万円以上	3.90	3.79	3.86
兵庫県10地域別			
神戸	3.67	3.65	3.66
阪神南	3.63	3.54	3.60
阪神北	3.61	3.65	3.62
東播磨	3.47	3.54	3.50
北播磨	3.47	3.52	3.49
中播磨	3.48	3.60	3.55
西播磨	3.48	3.33	3.40
但馬	3.36	3.48	3.47
丹波	3.00	3.38	3.36
淡路	3.60	3.55	3.56

生活満足感の平均値（社会属性別）

属性	2007	2008	全サンプル
性別			
男性	5.73	5.78	5.76
女性	6.42	5.95	6.20
結婚			
既婚	6.47	6.28	6.37
未婚ほか	5.27	4.98	5.12
年代			
10代	6.22	3.86	5.19
20代	6.10	5.53	5.86
30代	6.06	5.82	5.94
40代	6.14	6.03	6.08
50代	5.75	5.87	5.81
60代	6.57	6.11	6.33
70代	7.12	7.75	7.33
転入経験			
経験あり	6.09	6.01	6.05
経験なし	6.04	5.53	5.76
最終学歴			
中卒	6.05	4.13	5.02
高卒	5.65	5.59	5.62
短大・専修学校卒	6.44	5.70	6.07
大学卒	6.03	6.20	6.11
大学院卒	6.47	6.60	6.52
その他	7.04	5.91	6.48
雇用形態別			
正規職員・従業員	6.07	6.13	6.10
役員・経営者	6.62	5.91	6.22
自営業者	5.93	5.38	5.64
家族従業者	5.67	5.23	5.41
パート	5.87	5.83	5.85
アルバイト	4.76	4.95	4.83
派遣労働者（常用雇用型）	4.75	4.91	4.85
派遣労働者（登録型）	6.05	4.42	5.45
契約社員	5.74	4.74	5.15
嘱託社員	6.50	4.50	5.00

その他	3.40	6.67	4.62
現住所居住年数			
2年以下	5.84	5.34	5.59
3年から5年以下	5.20	5.53	5.36
6年から10年以下	6.25	5.84	6.02
11年から20年以下	6.16	6.22	6.19
21年以上	6.34	6.24	6.28
1人暮らし			
はい	5.19	5.61	5.39
いいえ	6.19	5.88	6.04
世帯年収別			
50万円未満	4.15	5.61	5.00
50万円-150万円	3.75	4.10	3.94
150万円-250万円	5.10	5.35	5.24
250万円-350万円	5.46	4.74	5.06
350万円-450万円	5.37	5.62	5.50
450万円-550万円	6.05	5.65	5.84
550万円-650万円	5.71	6.20	5.96
650万円-750万円	6.56	6.15	6.36
750万円-850万円	6.05	6.27	6.15
850万円-1000万円	6.90	6.88	6.89
1000万円-1200万円	7.14	6.66	6.89
1200万円以上	7.18	6.67	6.98
兵庫県 10 地域別			
神戸	6.24	6.34	6.27
阪神南	6.12	6.13	6.13
阪神北	6.21	6.16	6.20
東播磨	5.86	5.88	5.87
北播磨	5.86	6.36	6.07
中播磨	5.74	5.87	5.81
西播磨	6.15	5.43	5.75
但馬	5.14	5.69	5.63
丹波	5.83	5.38	5.41
淡路	6.35	5.55	5.68

安全安心感（居住地域）の平均値（社会属性別）

属性	2007	2008	全サンプル
性別			
男性	2.03	1.89	1.96
女性	2.09	2.00	2.04
結婚			
既婚	2.07	1.95	2.01
未婚ほか	2.04	1.92	1.98
年代			
10代	2.00	2.43	2.19
20代	1.99	1.91	1.96
30代	2.09	1.95	2.02
40代	2.09	1.92	2.00
50代	2.03	1.98	2.00
60代	1.97	1.87	1.92
70代	2.13	1.75	2.00
転入経験			
経験あり	2.06	1.93	2.00
経験なし	2.06	1.95	2.00
最終学歴			
中卒	2.05	2.13	2.09
高卒	2.17	1.95	2.05
短大・専修学校卒	2.08	2.03	2.05
大学卒	2.00	1.87	1.94
大学院卒	2.03	1.77	1.93
その他	1.74	1.96	1.85
雇用形態別			
正規職員・従業員	2.02	1.88	1.95
役員・経営者	2.00	1.97	1.98
自営業者	2.06	1.97	2.01
家族従業者	2.00	2.00	2.00
パート	2.19	1.96	2.07
アルバイト	2.22	1.97	2.09
派遣労働者（常用雇用型）	2.38	2.00	2.15
派遣労働者（登録型）	2.19	2.17	2.18
契約社員	1.84	1.81	1.83
嘱託社員	1.00	2.17	1.88

その他	2.00	2.00	2.00
現住所居住年数			
2年以下	2.03	1.91	1.97
3年から5年以下	2.19	1.98	2.09
6年から10年以下	2.00	1.94	1.97
11年から20年以下	2.05	1.89	1.96
21年以上	1.96	1.89	1.92
1人暮らし			
はい	2.13	1.82	1.98
いいえ	2.05	1.95	2.00
世帯年収別			
50万円未満	2.15	1.61	1.84
50万円-150万円	2.50	2.30	2.39
150万円-250万円	2.20	2.00	2.09
250万円-350万円	2.12	2.01	2.06
350万円-450万円	2.15	2.01	2.08
450万円-550万円	2.19	1.98	2.08
550万円-650万円	2.01	1.83	1.92
650万円-750万円	2.06	1.97	2.02
750万円-850万円	2.17	1.87	2.02
850万円-1000万円	1.97	1.80	1.88
1000万円-1200万円	1.94	1.85	1.89
1200万円以上	1.73	1.98	1.83
兵庫県10地域別			
神戸	2.04	1.92	2.00
阪神南	2.03	2.02	2.03
阪神北	1.98	1.93	1.96
東播磨	2.32	2.01	2.16
北播磨	1.92	1.92	1.92
中播磨	2.13	2.03	2.07
西播磨	1.97	1.93	1.95
但馬	1.86	1.85	1.85
丹波	2.00	1.97	1.97
淡路	1.85	1.83	1.83

安全安心感（日本）の平均値（社会属性別）

属性	2007	2008	全サンプル
性別			
男性	2.33	2.33	2.33
女性	2.47	2.44	2.46
結婚			
既婚	2.41	2.37	2.39
未婚ほか	2.37	2.42	2.40
年代			
10代	2.33	3.29	2.75
20代	2.32	2.26	2.29
30代	2.45	2.39	2.42
40代	2.40	2.37	2.38
50代	2.34	2.43	2.39
60代	2.35	2.47	2.41
70代	2.75	2.25	2.58
転入経験			
経験あり	2.40	2.37	2.38
経験なし	2.41	2.42	2.41
最終学歴			
中卒	2.70	2.39	2.53
高卒	2.54	2.49	2.51
短大・専修学校卒	2.45	2.47	2.46
大学卒	2.31	2.30	2.30
大学院卒	2.30	1.98	2.17
その他	2.04	2.17	2.11
雇用形態別			
正規職員・従業員	2.29	2.30	2.30
役員・経営者	2.50	2.34	2.41
自営業者	2.39	2.52	2.46
家族従業者	2.44	2.46	2.45
パート	2.62	2.35	2.48
アルバイト	2.41	2.50	2.45
派遣労働者（常用雇用型）	2.69	2.43	2.54
派遣労働者（登録型）	2.52	2.75	2.61
契約社員	2.05	2.44	2.28
嘱託社員	2.00	2.67	2.50

その他	2.20	2.00	2.12
現住所居住年数			
2年以下	2.35	2.41	2.38
3年から5年以下	2.46	2.48	2.47
6年から10年以下	2.38	2.37	2.38
11年から20年以下	2.36	2.32	2.33
21年以上	2.17	2.22	2.20
1人暮らし			
はい	2.32	2.29	2.31
いいえ	2.41	2.39	2.40
世帯年収別			
50万円未満	2.54	2.44	2.48
50万円-150万円	2.75	2.90	2.83
150万円-250万円	2.53	2.48	2.50
250万円-350万円	2.41	2.45	2.43
350万円-450万円	2.48	2.49	2.49
450万円-550万円	2.56	2.39	2.47
550万円-650万円	2.38	2.45	2.41
650万円-750万円	2.36	2.41	2.39
750万円-850万円	2.32	2.33	2.33
850万円-1000万円	2.39	2.12	2.26
1000万円-1200万円	2.16	2.15	2.16
1200万円以上	2.21	2.17	2.19
兵庫県10地域別			
神戸	2.35	2.35	2.35
阪神南	2.36	2.37	2.36
阪神北	2.41	2.36	2.39
東播磨	2.56	2.36	2.46
北播磨	2.28	2.28	2.28
中播磨	2.38	2.41	2.40
西播磨	2.48	2.40	2.44
但馬	2.45	2.33	2.34
丹波	3.00	2.63	2.64
淡路	2.35	2.32	2.33

市町別 主観データ分布

市町			居住地				日本				
		サンプル	平均値	標準偏差	＋ 最小値	－ 最大値	平均値	標準偏差	＋ 最小値	－ 最大値	
阪神間	神戸	神戸市東灘区	24	1.79	0.51	1	3	2.33	0.87	1	4
		神戸市兵庫区	12	1.83	0.58	1	3	1.92	0.67	1	3
		神戸市北区	17	1.88	0.49	1	3	2.59	0.94	1	4
		神戸市灘区	14	1.79	0.70	1	3	2.57	0.65	2	4
		神戸市長田区	12	1.67	0.49	1	2	2.17	0.83	1	4
		神戸西区	19	2.05	0.52	1	3	2.42	0.90	1	4
		神戸須磨区	14	2.07	0.47	1	3	2.50	0.65	2	4
		神戸垂水区	18	2.00	0.49	1	3	2.33	0.84	1	4
	阪神南	神戸中央区	14	2.14	0.86	1	4	2.14	0.86	1	4
		尼崎市	38	2.32	0.62	1	4	2.34	0.85	1	4
		西宮市	51	1.82	0.59	1	3	2.33	0.77	1	4
	阪神北	芦屋市	12	1.92	0.67	1	3	2.58	0.67	2	4
		伊丹市	22	1.86	0.64	1	3	2.27	0.88	1	4
宝塚市		16	1.94	0.44	1	3	2.06	0.68	1	3	
川西市		10	2.10	0.74	1	4	3.00	0.82	2	4	
三田市		6	1.83	0.41	1	2	2.50	0.84	2	4	
	川辺郡猪名川町	1	2.00		2	2	2.00		2	2	
播磨	東播磨	明石市	71	1.83	0.53	1	3	2.34	0.70	1	4
		加古川市	52	2.15	0.50	1	3	2.29	0.64	1	4
		高砂市	11	2.18	0.60	1	3	2.55	0.82	2	4
		加古郡稲美町	2	2.50	0.71	2	3	3.00	1.41	2	4
		加古郡播磨町	2	3.00	0.00	3	3	3.50	0.71	3	4
	北播磨	西脇市	2	1.50	0.71	1	2	3.00	0.00	3	3
		三木市	10	2.00	0.47	1	3	2.30	0.82	1	4
		小野市	4	2.00		2	2	2.25	0.50	2	3
		加西市	2	2.00	0.00	2	2	2.00	0.00	2	2
		加東市	6	1.83	0.75	1	3	2.17	0.75	1	3
	中播磨	多可郡多可町	1	2.00		2	2	2.00		2	2
		姫路市	93	2.01	0.58	1	4	2.38	0.81	1	4
		神崎郡神河町	1	2.00		2	2	3.00		3	3
		神崎郡市川町	1	1.00		1	1	2.00		2	2
		神崎郡福崎町	2	3.50	0.71	3	4	4.00	0.00	4	4
	西播磨	相生市	5	2.00	0.00	2	2	2.20	1.30	1	4
		たつの市	11	2.09	0.54	1	3	2.09	0.70	1	3
		赤穂市	4	1.75	0.96	1	3	2.50	1.29	1	4
		宍粟市	1	1.00		1	1	1.00		1	1
		揖保郡太子町	12	1.83	0.83	1	3	2.75	0.75	2	4
赤穂郡上郡町		5	2.00	0.71	1	3	2.20	0.45	2	3	
	佐用郡佐用町	2	2.00	0.00	2	2	3.50	0.71	3	4	
丹波	但馬	豊岡市	96	1.90	0.64	1	4	2.41	0.82	1	4
		秩父市	30	1.93	0.52	1	3	2.30	0.88	1	4
		朝来市	31	1.77	0.76	1	4	2.10	0.83	1	4
		美方郡香美町	19	1.79	0.92	1	4	2.32	0.95	1	4
		美方郡新温泉町	12	1.58	0.67	1	3	2.42	1.00	1	4
	丹波	篠山市	50	1.86	0.57	1	4	2.70	0.89	1	4
	丹波市	62	2.06	0.67	1	4	2.56	0.80	1	4	
淡路	淡路	洲本市	46	1.80	0.62	1	4	2.26	0.85	1	4
		南あわじ市	30	1.97	0.67	1	4	2.43	0.77	1	4
		淡路市	24	1.71	0.46	1	2	2.29	0.81	1	4

市町			幸福感				生活満足度				
サンプル			平均値	標準偏差	－	＋	平均値	標準偏差	－	＋	
					最小値	最大値			最小値	最大値	
阪神間	神戸	神戸市東灘区	24	3.71	1.20	1	5	6.50	2.48	1	10
		神戸市兵庫区	12	3.67	0.98	2	5	7.00	1.48	5	9
		神戸市北区	17	3.88	1.22	1	5	6.94	2.88	1	10
		神戸市灘区	14	3.36	0.93	1	5	5.93	2.23	1	10
		神戸市長田区	12	4.17	1.40	1	5	7.58	3.03	1	10
		神戸西区	19	3.21	1.13	1	5	4.79	2.39	1	8
		神戸須磨区	14	3.57	1.40	1	5	6.57	2.93	1	10
		神戸垂水区	18	3.61	1.20	1	5	6.17	2.66	1	10
		神戸中央区	14	3.86	1.17	1	5	6.21	2.83	2	10
	阪神南	尼崎市	38	3.21	1.32	1	5	5.58	2.71	1	10
		西宮市	51	3.94	0.86	2	5	6.90	2.10	1	10
	阪神北	芦屋市	12	2.92	1.16	1	5	4.58	2.54	1	9
		伊丹市	22	3.55	1.10	1	5	6.09	2.58	1	10
		宝塚市	16	3.69	1.08	2	5	6.13	2.50	1	10
川西市		10	3.80	1.03	2	5	6.40	2.32	1	9	
	三田市	6	4.00	0.89	3	5	6.83	3.19	1	10	
	川辺郡猪名川町	1	2.00		2	2	2.00		2	2	
播磨	東播磨	明石市	71	3.59	1.10	1	5	5.89	2.50	1	10
		加古川市	52	3.56	1.23	1	5	5.98	2.78	1	10
		高砂市	11	3.36	1.21	1	5	5.91	2.84	1	10
		加古郡稲美町	2	2.50	2.12	1	4	4.00	4.24	1	7
		加古郡播磨町	2	3.00	2.83	1	5	5.00	5.66	1	9
	北播磨	西脇市	2	4.00	0.00	4	4	7.50	0.71	7	8
		三木市	10	3.20	1.48	1	5	5.90	3.07	1	10
		小野市	4	4.25	0.96	3	5	7.50	2.65	4	10
		加西市	2	2.50	0.71	2	3	4.00	0.00	4	4
	中播磨	加東市	6	3.67	0.52	3	4	6.67	2.80	1	8
		多可郡多可町	1	4.00		4	4	7.00		7	7
		姫路市	93	3.61	1.13	1	5	5.87	2.48	1	10
		神崎郡神河町	1	4.00		4	4	7.00		7	7
		神崎郡市川町	1	5.00		5	5	10.00		10	10
		神崎郡福崎町	2	2.00	0.00	2	2	3.00	0.00	3	3
		相生市	5	3.40	1.67	1	5	5.00	2.74	1	8
		たつの市	11	3.55	0.82	3	5	6.09	2.21	3	10
		赤穂市	4	3.25	1.26	2	5	3.75	2.50	1	7
		宍粟市	1	4.00		4	4	7.00		7	7
西播磨	揖保郡太子町	12	3.00	1.60	1	5	5.33	3.23	1	10	
	赤穂郡上郡町	5	4.00	1.00	3	5	6.60	1.82	4	9	
	佐用郡佐用町	2	2.00	0.00	2	2	3.00	1.41	2	4	
	豊岡市	96	3.50	1.15	1	5	5.68	2.60	1	10	
丹波	但馬	秩父市	30	3.67	1.03	1	5	6.27	2.65	1	10
		朝来市	31	3.58	1.20	1	5	5.97	2.56	1	10
		美方郡香美町	19	2.74	1.19	1	5	4.11	2.87	1	10
		美方郡新温泉町	12	3.75	0.75	3	5	6.17	2.12	3	10
		篠山市	50	3.38	1.18	1	5	5.24	2.44	1	10
	丹波市	62	3.37	1.12	1	5	5.50	2.58	1	10	
	淡路	淡路	洲本市	46	3.52	1.01	2	5	5.28	2.70	1
南あわじ市			30	3.70	1.09	1	5	6.00	2.49	1	10
淡路市			24	3.42	0.97	2	5	5.50	2.40	1	10

市町		サンプル	一般的信頼感				災害時				
			平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	
阪神間	神戸	神戸市東灘区	24	1.58	0.50	1	2	2.38	0.82	1	4
		神戸市兵庫区	12	1.67	0.49	1	2	2.67	0.78	1	4
		神戸市北区	17	1.65	0.49	1	2	2.53	0.80	2	4
		神戸市灘区	14	1.57	0.51	1	2	2.29	0.61	1	3
		神戸市長田区	12	1.67	0.49	1	2	2.67	0.78	1	4
		神戸西区	19	1.68	0.48	1	2	2.74	0.56	2	4
		神戸須磨区	14	1.50	0.52	1	2	2.64	0.63	2	4
		神戸垂水区	18	1.61	0.50	1	2	2.39	0.61	2	4
		神戸中央区	14	1.43	0.51	1	2	2.43	0.76	1	4
	阪神南	尼崎市	38	1.58	0.50	1	2	2.58	0.55	2	4
		西宮市	51	1.49	0.50	1	2	2.47	0.73	1	4
		芦屋市	12	1.50	0.52	1	2	2.50	0.80	1	4
	阪神北	伊丹市	22	1.77	0.43	1	2	2.68	0.72	2	4
		宝塚市	16	1.31	0.48	1	2	2.44	0.63	1	3
川西市		10	1.50	0.53	1	2	2.90	0.32	2	3	
三田市		6	1.50	0.55	1	2	2.33	0.52	2	3	
		川辺郡猪名川町	1	2.00		2	2	3.00		3	3
播磨	東播磨	明石市	71	1.63	0.49	1	2	2.68	0.65	1	4
		加古川市	52	1.63	0.49	1	2	2.62	0.72	1	4
		高砂市	11	1.55	0.52	1	2	3.00	0.63	2	4
		加古郡稲美町	2	2.00	0.00	2	2	2.50	0.71	2	3
		加古郡播磨町	2	1.50	0.71	1	2	3.50	0.71	3	4
	北播磨	西脇市	2	1.00	0.00	1	1	2.50	0.71	2	3
		三木市	10	1.50	0.53	1	2	2.30	0.67	1	3
		小野市	4	1.75	0.50	1	2	2.50	0.58	2	3
		加西市	2	1.50	0.71	1	2	3.50	0.71	3	4
		加東市	6	1.67	0.52	1	2	2.67	0.52	2	3
	中播磨	多可郡多可町	1	2.00		2	2	2.00		2	2
		姫路市	93	1.61	0.49	1	2	2.59	0.68	1	4
		神崎郡神河町	1	2.00		2	2	2.00		2	2
		神崎郡市川町	1	1.00		1	1	2.00		2	2
		神崎郡福崎町	2	2.00	0.00	2	2	3.00	0.00	3	3
	西播磨	相生市	5	1.40	0.55	1	2	2.80	0.45	2	3
		たつの市	11	1.45	0.52	1	2	2.64	0.67	2	4
		赤穂市	4	1.50	0.58	1	2	2.50	0.58	2	3
		宍粟市	1	1.00		1	1	2.00		2	2
		揖保郡太子町	12	1.42	0.51	1	2	2.67	0.65	2	4
赤穂郡上郡町		5	1.40	0.55	1	2	2.60	0.55	2	3	
佐用郡佐用町		2	1.50	0.71	1	2	2.50	0.71	2	3	
丹波	但馬	豊岡市	96	1.52	0.50	1	2	2.48	0.74	1	4
		秩父市	30	1.63	0.49	1	2	2.53	0.73	1	4
		朝来市	31	1.48	0.51	1	2	2.16	0.73	1	4
		美方郡香美町	19	1.63	0.50	1	2	2.37	0.76	1	4
		美方郡新温泉町	12	1.50	0.52	1	2	2.58	0.90	1	4
	丹波	篠山市	50	1.68	0.47	1	2	2.66	0.69	1	4
		丹波市	62	1.66	0.48	1	2	2.60	0.59	1	4
淡路	淡路	洲本市	46	1.61	0.49	1	2	2.54	0.72	1	4
		南あわじ市	30	1.73	0.45	1	2	2.77	0.68	2	4
		淡路市	24	1.42	0.50	1	2	2.50	0.78	1	4

市町			サンプル	地域問題			
				平均値	標準偏差	十 最小値	一 最大値
阪神間	神戸	神戸市東灘区	24	2.88	0.74	1	4
		神戸市兵庫区	12	3.17	0.58	2	4
		神戸市北区	17	3.24	0.75	2	4
		神戸市灘区	14	2.57	0.76	1	4
		神戸市長田区	12	3.08	0.79	2	4
		神戸西区	19	3.05	0.62	2	4
		神戸須磨区	14	3.07	0.83	2	4
		神戸垂水区	18	3.33	0.69	2	4
		神戸中央区	14	3.14	0.66	2	4
	阪神南	尼崎市	38	3.05	0.70	2	4
		西宮市	51	2.73	0.70	1	4
		芦屋市	12	2.75	0.87	1	4
	阪神北	伊丹市	22	2.86	0.64	2	4
		宝塚市	16	2.69	0.87	1	4
川西市		10	3.10	0.57	2	4	
三田市		6	3.00	0.00	3	3	
		川辺郡猪名川町	1	3.00		3	3
播磨	東播磨	明石市	71	2.80	0.60	2	4
		加古川市	52	2.96	0.71	2	4
		高砂市	11	3.18	0.60	2	4
		加古郡稲美町	2	2.50	0.71	2	3
		加古郡播磨町	2	4.00	0.00	4	4
	北播磨	西脇市	2	2.50	0.71	2	3
		三木市	10	2.60	0.84	2	4
		小野市	4	3.00	0.82	2	4
		加西市	2	3.00	0.00	3	3
		加東市	6	2.83	0.75	2	4
		多可郡多可町	1	3.00		3	3
		姫路市	93	2.84	0.76	1	4
	中播磨	神崎郡神河町	1	3.00		3	3
		神崎郡市川町	1	3.00		3	3
		神崎郡福崎町	2	3.00	1.41	2	4
	西播磨	相生市	5	2.40	0.55	2	3
		たつの市	11	2.82	0.75	2	4
		赤穂市	4	2.75	0.50	2	3
		宍粟市	1	2.00		2	2
		揖保郡太子町	12	3.00	0.74	2	4
赤穂郡上郡町		5	2.60	0.55	2	3	
佐用郡佐用町		2	2.00	0.00	2	2	
丹波	但馬	豊岡市	96	2.88	0.73	2	4
		秩父市	30	2.77	0.73	1	4
		朝来市	31	2.74	0.73	2	4
		美方郡香美町	19	3.11	0.81	1	4
		美方郡新温泉町	12	2.67	1.07	1	4
	丹波	篠山市	50	2.94	0.65	2	4
	丹波市	62	2.84	0.73	1	4	
淡路	淡路	洲本市	46	2.76	0.67	1	4
		南あわじ市	30	2.77	0.77	2	4
		淡路市	24	3.08	0.72	2	4

市町別 日常生活における不安

		サンプル数	1位	2位	3位
市町	神戸市東灘区	24	・収入、所得 ・老後の世話	・自然災害	・収入、所得 ・自分の健康 ・自分の健康
	神戸市兵庫区	12	・収入、所得	・老後の世話 ・自分の健康	・自然災害
	神戸市北区	17	・家族の健康	・日本の治安	・家族の健康
	神戸市灘区	14	・収入、所得 ・老後の世話	・家族の健康	・家族の健康 ・食の安全
	神戸長田区	12		・老後の世話	
	神戸西区	19	・収入、所得	・自分の健康	
	神戸須磨区	14	・日本の治安	・自分の健康 ・自分の健康	・食の安全 ・メディアの姿勢
	神戸垂水区	18	・自然災害 ・自然災害	・家族の健康	
	神戸中央区	14	・特にない	・食の安全	・家族の健康
	尼崎市	38	・特にない	・家族の健康 ・収入、所得	・収入、所得
	西宮市	51	・収入、所得	・家族の健康	
	芦屋市	12	・自分の健康	・家族の健康	
	伊丹市	22	・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康 ・食の安全
	宝塚市	16	・収入、所得 ・自分の健康	・家族の健康 ・自分の健康	・自然災害
	川西市	10	・老後の世話 ・家族の健康	・家族の健康	・日本の治安
	三田市	6	・食の安全	・自然災害	
	川辺郡猪名川町	1	・収入、所得	・家族の健康	・自分の健康
	明石市	71	・収入、所得	・家族の健康	・収入、所得
	加古川市	52	・収入、所得	・家族の健康	・家族の健康 ・自分の健康
	高砂市	11	・収入、所得	・家族の健康 ・老後の世話	・食の安全 ・近隣の環境
加古郡稲美町	2	・収入、所得 ・資産、負債	・家庭内関係	・家族の健康	
加古郡播磨町	2	・収入、所得 ・日本の治安	・資産・負債 ・食の安全	・警察の防犯 ・食の安全	

		サンプル数	1位	2位	3位
市町	西脇市	2	・日本の治安 ・自然災害	安 ・自分の健康	係 ・老後の世話
	三木市	10		・自分の健康	
	小野市	4	・老後の世話 ・収入、所得	・家族の健康	
	加西市	2	・特にない	・家族の健康	・自然災害
	加東市	6	・収入・所得	・食の安全	・日本の治安
	多可郡多可町	1	・特にない		
	姫路市	93	・収入、所得	・食の安全	・食の安全
	神崎郡神河町	1	・老後の世話	・家族の健康 ・メディアの姿	・自分の健康
	神崎郡市川町	1	・食の安全 ・資産、負債	勢 係	・家族の健康 ・収入・所得
	神崎郡福崎町	2	・食の安全 ・居住地の治安	話	・家族の健康
	相生市	5		・自分の健康	
	たつの市	11	・家族の健康		・自分の健康
	赤穂市	4	・資産、負債	・自分の健康	
	宍粟市	1	・老後の世話	・収入、所得	・地域防災体制
	揖保郡太子町	12		・収入、所得	
	赤穂郡上郡町	5			
佐用郡佐用町	2	・メディアの姿 勢	・収入、所得 ・資産、負債	・家族の健康 ・食の安全	
豊岡市	96	・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康 ・自分の健康	
秩父市	30	・収入、所得	・収入、所得	・家族の健康	
朝来市	31	・収入、所得	・家族の健康		
美方郡香美町	19	・収入、所得	・家族の健康 ・収入、所得	・自分の健康	
美方郡新温泉町	12	・収入、所得	・家族の健康	・自分の健康	
篠山市	50	・収入、所得	・家族の健康	・収入、所得	
丹波市	62	・収入、所得	・家族の健康 ・自分の健康	・自分の健康	
洲本市	46	・収入、所得	・家族の健康	・自然災害	
南あわじ市	30	・収入、所得 ・収入、所得	・自分の健康	・家族の健康	
淡路市	24	・特にない	・自分の健康	・自然災害	